

---

# けいおん！とある弟の人生

カッシー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

けいおん！とある弟の人生

### 【Nコード】

N1035U

### 【作者名】

カッシー

### 【あらすじ】

中学三年生の僕――平沢優は双子の姉、平沢憂と姉の平沢唯の三人姉弟。いきなりの父さんからの手紙で来年から桜々丘高校に通う事になってしまった。さて、これからどうする？

## 中学三年生（前書き）

オリキャラが主人公なのでそれでもいい！という人はぜひ見てくだ  
さい！

## 中学三年生

「ゆうー」

「ちよつ！唯姉いきなり抱きつかないでよ！」

「いいじゃんスキンシップだよ！それとも優、私の事嫌い？」

「いや……まあ好きだけど……（家族として）」

「じゃあいいじゃん！」

「それとこれとは話が……うわぁ！」

僕の名前は平沢優、平沢家の末っ子で中学三年生

「助けて〜憂姉〜」

「ちよつと待ってて、いつか助けるから」

いつかじゃだめだよ憂姉、これじゃ双子の姉、憂姉が使えないな自分で解決するしか……

「ちよつと唯姉！いい加減離れて！じゃないと俺の理性が……」

本当に理性が崩壊しそうだよ！抱かれてるうえに柔らかい「あれ」があたっているからホントに！

「えー、しょうがないな〜」

と言って離れてくれた。もうちょっと抱かれてても……だめだ！そんな事をかんがえちゃだめだ！弟としてだめだ！

「どうしたのゆうー、顔色悪いけど……」

「へ？どうってことないよ！あ！そうだ、部活始めるの？唯姉？」

「いやーまだ決めてないよ！」

それ声を張り上げる事じゃないでしょ唯姉……

「え……もう二週間たってるよお姉ちゃん」

「う……それ和ちゃんにも言われた」

「和さんにまで言われたのか……」

「大丈夫だよーゆうーお姉ちゃんに任せなさい！」

任せられない……心の中で突っ込む

「お姉ちゃん流石に入ったほうがいいよ」

おっ、ついに憂姉が動い出したか

「お姉ちゃん部活始めるの早いほうがいいよ」

「うっ……憂まで」

「早く決めなきゃ部活にも遅れちゃうしなにより……」

おー流石憂姉、どんどん言葉が出てくる

「分かったよ、一応部活に入ってみるよ」

「それでこそ唯姉！」

「えへへ〜そうかな〜」

昔から褒めると変わらなく、デレ(?)るなー

「まあそれはともかく、優、どの高校はいんの」

「まだ決めてないよ、本当は桜々丘高校に入るべきなんだけどね女子高だしねー」

「大丈夫だよ！」

「何で？」

「それはね〜」

なんか嫌な予感が……

「ゆうーが女子になればいいんだよー！」

的中したよ……

「だめだよ唯姉……」

「え？どうして？だってどこからどうみても、私ににてるじゃん」

心にトゲが刺さる。確かに僕は女子に見えるかもしれない。けどそれを本人の前で言うなんて……唯姉ただけ天然なんだよ

「確かに……」

憂姉まで納得したらだめだろ……

「とにかく明日学校だから寝るよ」

「じゃ私も」

「おやすみ」

と言って唯姉と僕はリビングを後にする

「いろいろ大変だねーゆうー」

「うん、大変だよ」

唯姉のせいで……というのは心の中にしまっておこう

「じゃあおやすみ」

「うん、じゃあねー唯姉」

と言って自分の部屋に入ってつぶやく

「はあ……どうしょ、まあいいや、明日決めよう!」

そんな事を言いつつ寝てしまった

\*\*\*

「……う……きて」

ん?なんか声ができる気のせいかな?

「起きて!」

「うわ!」

耳がキーンとする、初めてだな憂姉にやられるのは

「これを見て」

「これ?父さん達から?」

「うん」

そう言った後、手紙をみると信じられないことが書いてあった



優へ

えーと、唯から聞いていると思うけど、桜々丘高校共学になるからそこへ入れ。反抗しても無駄だよ！もう入学手続きは終わっているよ。なぜかと言うと初めて男子が桜々丘高校に入るから、らしい。

まあ頑張れ

優の両親より

「…………え？えー！！！！」

「なにこれ？え？なんだよいきなり共学？桜々丘高校には入れ？意味分からんよ。まてよ……唯姉から聞いていると思うけどって書いてあったけどなんで言わないんだ？」

「ゆうーうるさい」

「あつ唯姉！来年から共学になるって本当？」

「え？なにそれ？」

あーそうだった相手は唯姉だそんな事知ってる分けない

「あーあ！！もう学校いつてくる！」

「ゆうーよくわからないけど、まだ6時だよ行っただって無駄だよ」

そうだった憂姉ならともかく、唯姉に言われるなんてなんか悔しい

「ともかく、朝食を食べようよ、それから考えよう」

憂姉がまとめてくれたのでリビングに使ったけど、そこで唯姉の部

活の事とか僕の事などで、用意をしていた憂姉以外、学校に遅れたのは言うまでもないよね！

## 中学三年生（後書き）

えーと、ついに初めてしまいました。諦める事なく頑張っていきたいと思います。感想アドバイスもください！

唯姉！軽音部入部！（前書き）

頑張ります

唯姉！軽音部入部！

「お前が遅れたのは珍しいな」

「なんだよ真時、また俺を茶化しにきたのか？」

こいつは阿部真時、小学生の時に仲良くなった奴だ、とにかく変態だけど……

「違う、違う、お前志望校決めたのかなって」

志望校の話いきなりきたよ……これはなんとか誤魔化さなければ変態って言われる。なんとかやり過ごさなきゃ

「い……いや、まだ決めてないよ！」

「どうしてそこで声を張り上げるんだ？」

「はあ？なにいつてんだ？ぼ……僕は声なんて張り上げてないよ！」

「お前はツンデレか？まあいいや、俺もまだ決めてないんだ、仲間だな。」

「ツンデレって何？とにかく僕は入ってないよ」

「おーい、優ー」

この最悪のタイミングで憂姉登場

「なにしてるの？」

「あっ平沢さん、こいつの志望校の話」

「あー今日決まったよね！」

「え？決まってるじゃないの？」

あー神様仏様憂姉様どうか空気をよんで……

「桜々丘高校だよ」

くれない……

「え？お前志望校桜々丘高校？え？なんで？あそこ女子高だろ？いくらお前だからってないだろー、まさかお前女装して行くつもりだったのか？そこまで変態だとは思わなかった……」

言われると思ったけど、これはひどいな、唯姉と同じと言われるよりきつい

「違うよ、来年から共学になるんだよ」

おっ、すかさず憂姉のフォロー。ありがとうございます

「あーそうだったのかてつきりお前が女装して行くつもりだったのかと」

「……お前どこまでも変態だな」

「え？ひでーな、お前」

と言ったところで先生が入ってきたので先生ナイス！と思いながら自分の席に戻った

\*\*\*

昼休み~~~~

「おーい、優、一緒にお昼……」

「憂姉一緒に食べようよ」

「イイよ」

「お前は重度のシスコンだな」

「は？なんで？シスコンなんだ？」

「阿部君どうして？」

「この姉弟は鈍感だね」

と言って去って行った。なにが言いたかったんだ？あいつ

「ところで唯姉は何部に入ってたんだろう」

「うーん、わかんない」

「もしかしたら軽音部だったりしてね」

「え？なんで？」

「軽い音楽って書いてあったから、とか言ってる」

「そうかもしれない」

と言って苦笑いをした。まあこれがホントの話になるなんて思いもしなかったけどね

\*\*\*



平沢家

「えーーーーー!!」

「お姉ちゃん軽音部に入ったの？」

「唯姉……」

「みんなどうしたの？」

「入ってほしいと言われちゃって」

「あー、マネージャーとしてとかね」

「ゆうーその他の人に言われると悔しいからやめて、あと和ちゃんにも言われた」

また和さんかよ!!と、心の中で突っ込みつつ、流石、和さん伊達に幼馴染やってないねとも思った

「えーと、動機はなんなの？お姉ちゃん」

「えーとかっこ良かったから」

絶対に嘘だろ唯姉……

「ホントはなんなの！」

「え？これがホントだよ！」

「嘘つかない、唯姉分かってるよ」

「うう……えっと軽い音楽って書いてあったから」

おお……僕の予想当たった！

「やっぱりね」

「うう……けど入ってくださいって言われたのは本当だよ……！」

「そうなの？」

「うん、ギターの人数足りないからって言われて」

「けど唯姉大丈夫？すぐ飽きちゃうじゃん」

「大丈夫だよ！なんか続けそうなのがする！」

「そうか……頑張ってね唯姉」

「うん！頑張るよ！」

そう言っ僕に抱きついて来る

「やめてよ唯姉……助けてくれ」憂姉

「ゆっー」

「ちょ憂姉まで！きついよ唯姉と憂姉！頼むから離れて！！」

その後、ずっと抱きついたまま寝てしまつて、朝起きたらいろんな意味でやばいことになっていたのをまだ僕は知らない

唯姉！軽音部入部！（後書き）

えーとテスト勉強が全く進まないんで、書きました。感想、アドバイス待ってます

テストなんて消えてしまえばいいのに……はあ

## プロフィール（前書き）

プロフィールです本当はなかったんですけどせっかくだから割り込み投稿しましたネタバレ注意！

## プロフィール

初めまして、作者ですプロフィールなので今日はゲストをお呼びしています

「俺、阿部真時です」

「僕、平沢優です」

「どーでもいいからさっさと始めようぜ」

えー、チェ自分のプロフィールも発表したかったんだけどなー

「こんなところで、プロフィールなんて絶対だめでしょ」

あーはいはいそうだねーという事でまずは主人公優君から！

ひらさわゆう  
平沢優

性別 / 男

年齢 / 14才

誕生日 / 2月22日

好きな食べ物 / 美味しい食べ物、甘いもの

嫌いな食べ物／ピーマンなど野菜全般

特技／唯や憂の真似、昼寝、突っ込み――主に唯

趣味／ごろごろすること、寝ること、

外見／唯達に似ている。それを嫌うため髪型は唯より短かめになっているが、床屋に行くのが面倒なのでよく「平沢先輩ですか？」と学校で言われて間違われる

詳細／唯の妹で憂の双子の弟。常識人ではあるけど、たまに唯とおなじく突拍子もないことを言い出すなど天然である。よく唯の言葉に影ながら突っ込んで。もともと桜々丘高校は行く予定が全くなくて、いきなりの父さんからの桜々丘高校共学宣言で桜々丘高校に通うことになる。自分はいく姉妹好き（シスコン）とよく言われるが自分からして見れば全くシスコンだと気づいてない。よく平沢姉妹に抱きつかれる。結構な純粋でなんとか理性を保ってる。勉強は唯程ではないが、できないだか唯とおなじく「やればできる子」絶対音感 相対音感の持ち主だがあまり気づいてない

高校ではギター担当、声が高いのでボーカルもしたりする。

関係（中学3年生時）

平沢 唯――突っ込んだりするが、信頼している、大切な家族好き

平沢 憂――昔から信頼しきっている 大切な家族 好き

秋山 澪――おなじく突っ込みやなのでけっこう気が合う 知り

合い

田井中 律――飽きているが、面白いと思っている 知り合い

琴吹 紬――突っ込みましょう！と思っている 知り合い

中野 梓――あまりあったことがないけど、「ある時」であった  
ので、知り合い

真鍋 和――苦勞を分かってくれる数少ない人の1人 友達

まあこんなところかね

「そうですね」

「何か設定多くね？」

そりゃ主人公だからね

「じゃ俺はどうなの？」

阿部真時のプロフィールはこちら！

あべしんじ  
阿部真時

性別 / 男

年齢 / 14歳



誕生日 / 10月14日

好きな食べ物 / ご飯、焼肉

嫌いな食べ物 / たけのこなどきのこ全般

外見 / 金髪の美青年なのだが後述のせいでもない一応関西出身

詳細 / 確かに結構な美青年なのだが性格が悪く変態でナンパしたり変なことをよく妄想したりしてるにやけてる顔がキモい（オタクではない）いつも優が「その性格直せばモテる」と言っているの直せない桜々丘高校に入るかは作者の気分などで決まる

関係

平沢 優―――けっこう気軽に話し合える 親友

平沢 憂―――しゃべったりするがあまり仲良くない 知り合い？

鈴木 純―――幼馴染すんごく仲が良い 親友

以上でした

「ちょっと待て作者！なんでこんな俺だけ短いんだよ！」

主人公じゃないから

「えーそんな理由で？後、桜々丘高校入るの気分次第ってどうゆう意味だよ！」

そのまんまの意味

「てめーなめやがって！今にみてろよチクショウ」

ハイハイ、と言うことでプロフィール終わりました。今後オリキヤラは増やさない予定ですが、増えるかもしれません。その時はまたプロフィールするんでよろしく！では本偏で！！

「「「よろしくお願いします！！」」」

## プロフィール（後書き）

終わりました。

実を言ってもテストなんてどうでもいいや！パターンにはいったので、また続きを近いうちに書きます！よろしく！

**ギター購入！（前書き）**

感想アドバイス待ってます！

ギター購入！

「ゆうー！」

「なに唯姉、ってうわ！」

いきなり抱きついて来る唯姉、慣れてきた自分が怖い

「お願いがあるんだけど」

「なに唯姉？」

唯姉がもじもじしながら言おうとしてる。これは…

「お金なら貸さないよ！」

「えっ！まだ何も話してないよ？」

「唯姉がもじもじしながら言おうとしてる時は大抵お金貸してくださいとかだから」

「ひどい！」

「これが事実だから」

「うう……」

だからって上目遣いやめて、ホント僕はその目に弱いから。ああーもういいや！

「いくらほしいの!」

「え?くれるの?」

と言って顔を上げて笑顔になる僕はこの笑顔にも弱い

「何円?」

「えつとね、5万円!」

え?5万円?それって僕のお小遣のえーと……お年玉合わせてやつ  
とたりる額じゃん!!

「ごめん、流石に5万円は無理だよ憂姉に頼んだら?」

「えー、わかったよー」

唯姉、そりやないだろ5万円で何が買えると思う?マスクメロンな  
んて3個ぐらい買えるし、焼肉なんてパーティーできるぞ絶対だか  
ら、憂姉でも持っていないと思う。例えば変すぎたかな?ごめんなさ  
い。って一体だれに謝ってんだろ……

\*\*\*

明後日

「ってことでギター買っちゃいました！」

どうゆうことでのの？唯姉？と軽く突っ込んでおこう

「お姉ちゃんこのギターなんで買ったの？」

「可愛いから！」

言っちゃったよ唯姉……もって考えないの？ってこのギターまさか

……

「え？まさかこれギブソン・レスポール？スゲえじゃん！唯姉これ高いんだよ！」

ってあれ？唯姉なんでこんなに高いの買えたんだ？

「唯姉なんでこんなに高いの買えたの？」

「え？友達が安くしてくれたから」

「すごいね。お姉ちゃん」

へー友達が安くしてくれたからか、ってえー！安くしてくれたの？どついう友達を持ったんだ？唯姉！あと憂姉！その反応違うと思  
うよ……

「ゆうーなんでこのギター知ってるの?」

「僕の好きなバンドの1人が使ってるから」

「へーそうなんだ」

聞いてきたんだからもっといい反応してくれ……

その夜

「えへへ可愛いな」持ってみたいして……おお!ミュージシャン  
っばい!」

うん!うるさいよ唯姉、隣の部屋だからよく聞こえる。あとギター  
ひいたら……

「サインの練習しなきゃ!」

あーもう、仕方ない注意しにいくか…

「唯姉「お姉ちゃん!うるさい……」」

「ねえねえ、ミュージシャンっぽくない?」

「確かにミュージシャンっばい……」

だけど……



「お姉ちゃん、ミュージシャンになりたいならギター弾けば？」

「僕もそう思う」

「そうだね、けどなんか可愛いからなんか見とれちゃって」

「けどもう遅いよ？寝たらどう？」

「うん、そうする」

そう言ってベッドにギターを入れるどうしたんだろ唯姉……

\*

\*  
\*  
\*

翌日

「優、起きて」

「あと5分……」

「二度寝はだめだよ」

「わかったよー」

と言って起き上がると急に憂姉が抱きついてきた

「うわっ！どうしたの？憂姉」

「なんかお姉ちゃんに似てきたからつい……」

「あーそっぴい最近切ってないもんなー髪」

確かに髪長くなると唯姉達に似てくるけど、理由になってないからね憂姉、いつも唯姉ほどじゃないけどして来るし、あと憂姉、「あれ」が当たってるよ！うん、やっぱり憂姉のほうが胸がおお……だめだ！ホントにそっぴいこと姉弟としてだめだから！自分よ、そっぴいこと考えることはよそう。うん！その通りだ

「憂姉、あのー離れて……」

「優あつたかい」

だめだ！人の話聞かなくなってる！これはもう止められない！その後10分ほど抱きつかれた、これじゃ早起きした意味ない……その後学校に行く準備をしてると

「あ！唯姉に国語辞典かしたまんまだった」

返してもらわなきゃ、と思い唯姉の部屋に行くと、憂姉がいた。多分起こしてるんだろーな

「唯姉く借してた国語辞典返し……」

え？唯姉の部屋……なにこの風景……ギターと

「「添い寝……！」」

憂姉と言うタイミングが同じだったおーすごい、ってか何してんの！唯姉昨日ギターを布団の中にいれてたのはそのためか……

その後学校の準備とか唯姉のギターの話とかで、またまた学校に遅れそうになっちゃったのはもうあれだね決まってるようなことだよ  
ね！



## ギター購入！（後書き）

最後グタグタになっちゃいましたねすみませんホントはテスト終わってから投稿しようと思ったんですけど、ヤル気が全く湧かなかつたんでつい…とにかく僕も優もいろいろこれから頑張るんでよろしく！感想、アドバイスも待ってます！

## 憂姉のような優（前書き）

5話目です！感想、アドバイスよろしく！今回短かめです

## 憂姉のような優

5月になったそろそろ誕生日なのだがそれより前に定期テストがあるまあいろいろある時期なのだがそれよりも……

「ホントにそろそろ髪切りにいった方がいいかもしれない」

「そうだよ、ゆうー私が切ってあげようか？」

「だ……大丈夫だよ」

「えーしょうがないなー」

しょうがないでしょ！

「けど、ホント私達似てるよね」

「そうだよねーあつそうだ！」

唯姉どうしたんだろ？いきなり髪型をいじりはじめた。まさか……

「はい、憂の完成！次はゆうーの番だよ！」

その通りでしたーこの前は唯姉のまねだったよね！

「はい」

笑顔でゴム渡されたら、断れないよ！ってかどこから出てきたんだよ唯姉！

「分かったよ」

と言ってゴムを持った。僕はこれをつける時、男を捨てる事になっ  
てしまう。けど唯姉と憂姉の笑顔には勝てないしなー、もういい！  
つけようじゃないか

「うわゝすごく似てる。と言つか私だよ。優」

傷つくコメントありますがとうざいます。泣いていい？

「泣き顔も憂そっくりだね！」

唯姉さらりと傷つく言葉を言ってくれるじゃないか

「よし！決めた！優、明日その髪型で行く事！」

「え？えー！ー！」

絶対嫌だよ！絶対嫌だよ！これ大事だから2回言ったよ！

「ダメ？」

「私も皆にどんな反応されるか見てみたい…」

唯姉と憂姉上目遣いやめてゝホントにちょっとその目だけは

「分かったよ」

「「やった」」



やばいかもしれない……

\*\*\*

翌日

「ホントにこの髪型で行くの？」

「当然だよ！」

唯姉はSだったのか……

「ほら！早く行かないと遅刻しちゃうよ！」

「はい」「」

歩いてるとみなさんが僕達を見てくるそりゃね同じ顔をした外からみたら、3姉妹がいる訳だからそうだろうけどなんか照れるなー

「今日はね〜……」

唯姉は相変わらず部活の話をしている、打ち込めるのが出来たのはいいけど練習の話が出てこない練習もしようよ唯姉……

そんな話を話していると別れの場所がきた憂姉と一緒に歩く。これ程にている双子の姉弟はいないだろう

とか話しながら着いた。さあ心の準備のをしなければならぬ覚悟を決めるんだ僕！

「お…おはよう」

入ってきた皆は僕に啞然としていたそうですね〜憂姉が2人もいるんだから

「え……どうしたの？」

と言う1人の女性が近づいてきたのでその後につづいてぞろぞろと質問してきた質問の大半はこれだ

「どっちが平沢憂でどっちが平沢優？」

だった答えようとしたがどっちだか賭けをしようって事になってしまったその時だ

「おーっす」

真時がやっと来てくれたあいつなら

「おまえら！平沢優はどっちだ？」

分かってくれない……お前と俺は昔からの親友じゃないのか？とその時

「優、どうしよう」

憂姉が聞いて来た

「大丈夫だと思う」

そんなさらに心配する言葉を言っただろうか？と思っただけがまたまたその時。男子と女子の目がこっちに向いた

「ちょっと憂姉？」

抱きついて来た。きっと心配してると思ったんだろけど学校でしかも皆の前でちよいと男子の目がやばい

「おい男子共……このクソシスコン野郎を……殺せ！」

その真時の声と共に男子が襲ってきた。やばいそう直感的に感じ逃げる

その後授業中に殺気に襲われ、休み時間は追いかけられる。当然体力に限界を感じ最終的に半殺しにされたのは言うまでもないよね！



## 憂姉のような優（後書き）

この主人公なかなかキャラがおさまらないホント苦労してます。けど書いてて楽しいんで書いてます。まあどんどん書き書いていくんでこれからもよろしく！

**勉強会！（前書き）**

感想、アドバイスよろしく

勉強会！

「床屋、長期休業だつて」

髪を切るため床屋へ行つたが、不幸な事に長期休業だった、はあゝ  
当分この姿か…

「ゆうー良かったじゃん」

良くない！つてなんで憂姉、そんなにホツとした顔になってんの？

「ところで憂姉、来週の間テストの勉強見てくれない？」

「いいけど、どうして？」

「分からない所があるんだけど」

「分かった。お姉ちゃん勉強しないの？」

「大丈夫だよ」

とか言いながら自分の部屋にいく、絶対大丈夫じゃないでしょ！ほ  
ら、憂姉が心配そうな目でみてる！この目を見るとこっちも心配に  
なってくるんだよ！

「唯姉、ホントに大丈夫？」

「ホントに大丈夫だよ」

もう僕は唯姉を止める事は出来ない。そう直感で感じその通りになつてしまった、唯姉大丈夫かな…

\*\*\*

憂姉に勉強を教えてもらってリビングで会話していると

「ジャジャーン」

唯姉がいきなり本を出してきた。何々……「サルでも分かるコード」  
？なんだそりや

「ギターのコード表が載ってるんだよ！」

「ああギターね、それって見せる必要あるの？」

「あるよ！」

「何があるの？お姉ちゃん」

憂姉が分からないのなら僕にも全く分からない

「それはね……」



おーこれってなんかデジャヴ……

「憂かゆうー、一緒にギターやんない？」

しちゃったよ。

これは何なんだろう絶対僕が買わされるパターンだ！そう残念な事に決まってるんだ！

「ういーだめ？」

「うん。家事とかやるからギターやる暇あんまりないと思う」

「じゃあゆうーは？」

平常心だぞ平沢優、平常心なんだ！

「僕もだm……」

そんな上目遣いで僕を見ないでくれ！頑張れ自分！負けるな自分！しかし…その上目遣い、わざとやってるんじゃない？……もうダメだ…

「いいよ」

「本当？ありがとう」

負けた……負けてしまった。上目遣いの天才平沢唯に

「だけど中間テスト終わってからね」

憂姉が同情の目で僕を見てくる、頼むから見ないでくれ！

そういう事で、僕のギター人生は始まった……（始まってしまった）

\*\*\*

く中間テスト返却日当日

「良かった」

なんとかテストで補習を回避して補習を受ける真司の肩をポンと叩くと

「お前は俺の仲間だと思ったのに……くそ！この男女野郎に負けるなんて」

とか言つて泣き出した。男女つてなんだ？よく分からないけど、酷い、真司をほつといて家に帰る。今日は憂姉が先に帰ってる筈だ。そう思いながら家に着く、あれ？靴が多いお客かな？

「ただいま」

「あつ、帰ってきたおーいゆうー」

みんな唯姉の部屋にいるのかな？

「こっちなよ」

そう唯姉に言われたので唯姉の部屋に行く

「あれ？唯が2人？妹さんもう1人いたのか？」

あっそうだった、髪切ってないんだ！

「違うよ、弟の優だよ」

「……弟……！！」「……」

その場にいた唯姉の友達全員がおどろく。とくに黒髪でストレートの女性は部屋の端に行ってしまった  
これはこれで何か悲しい

「ホントに弟なのか？」

カチューシャをかけた女性が聞いてくる

「はい、男です」

「驚きだわ！」

お嬢様っぽい人がいまだに驚いてる

「で、唯姉達は何してるんですか？」

「へ？勉強会だけ……」

なるほど……だがカチューシャのひとは漫画読んでよ

「君は本当に男なのか？」

黒髪でストレートの人が緊張しながら話しかけてくる緊張する必要があるのかな？

「はい、そうですけど」

「」「凄いな……平沢3姉妹」「」

「姉妹じゃないです！姉弟です！」

そんな事に意地を張っていると憂姉がきた

「皆さん、買い置きのお菓子ですけど、良かつらどうぞ」

「」「出来た子だー！」「」

心の声がこちらにも聞こえる。まあきつと唯姉と憂姉の違いって凄  
いと思ってるんだうな

その時ケーキの匂いがした

「あれ？ケーキの匂いがする……」

「ケーキ？全く匂いがしないぞ」

と、カチューシャの人は言うが

「え？よく分かったわね、」

そういつてお嬢様っぽい人がケーキを出してきた当たりだな

「はい、匂いがしたんで」

「流石私の弟」

と言つて抱きついてきた。唯姉に褒められると複雑な心境だなとおもったり、いちいち抱きつくとも面倒だといつも思っただけで唯姉は疲れないのかな？あと普通女子が男子に抱きつくなんてあまりないけど、あの3人はあんまり違和感ないんだろーな。などと考えてる自分つて余裕だなともおもいながら。まあ要するに誰でもいいから助けて！と言つ事

その後、軽く質問された後、憂姉のところでゲームをしていると途中でカチューシャの人が乱入してきた。ふざけすぎて追い出されたらしい。そして、帰りまでゲームをやつてると黒髪ストレートの人が「馴染みすぎ！」と言つて突っ込んで来た。その時親近感が湧いたのは気のせいではないな。絶対に。

結局、名前も聞かなかつたなと思ひながら見送る。まさかこのひと達が軽音部の人達とは知らず、しかも今後深く関わっていく事も知らずに……



## 勉強会！（後書き）

初めて唯以外の軽音部キャラ出せました。あずにゃんもそろそろ出ると、思いますが作者の文章力がないのであまり出せないかもしれません。あずにゃん以外の軽音部キャラはまた出るんで、ではまた次回

## 優！ギター購入！（前書き）

7話目です。感想アドバイスなどなんでもいいのでください！



優！ギター購入！

土曜日

「ねえゆうー」

突然オレンジジュースを飲んでいた僕に唯姉が話しかけてきた

「なに唯姉？」

最大級のスマイルで返す。すると

「ギター買いに行こ！」

あちらも最大級のスマイルで返してくる。え？なんでギター買っただ？

「唯姉、なんでギター買いに行くの？」

「忘れちゃったの？ほら、定期テスト前だよ」

定期テスト前？えーと、まさかあの話じゃね？

「まさか……リビングで話していた時の事じゃ……」

「うん！そっだよ！」

え…あの話本当だったの？もう忘れているのかと

「ゆうーさあギターを買いに行こっ」

ちょっと引つ張らないでくれ！なんでこういう時だけ力が強いんだ…

\*\*\*

ギター店

「はい、ついに来ちゃいました」

「速いな…流石小説」

「ゆうー何か言った？」

「いや何も」

僕達はずいにギター店に来てしまった

「へーいろんなギターがある…」

え？何このギター、ツインネックって書いてあるけど、弾ける人って手が4本あんの？

安いものから高い物までたくさんあって、凄いと思う。

「みて見て」

唯姉もはしゃいでる、どうしたんだろ

「なに、唯姉？」

唯姉の所に駆け寄ると唯姉は1つのギターを見つめていた

「どうしたの？唯姉？」

恐る恐る聞いてみる。するとこっぴどい答えが帰ってきた

「可愛い」

でました唯姉の可愛い発言、なんでも愛着がわく癖だ。まあ僕も同じ何だけど……

「確かに可愛い……」

この時に僕は唯姉の弟なんだなと改めて実感した

「値段は8万円か」

正直言つて、高い。僕の今のお小遣いじゃお年玉があっても足りないかー

「大丈夫！私が出してあげるよ！」

「ホント！？いくらぐらい？」

「えっとね……」

そう言つて財布を確認する

「3万円かな……」

3万円か…よし、なんとか買える

「じゃあこれにするよー！」

と言つて店員さんにこのギター買いたいと言つた後、会計の時店員さんが唯姉を見て結構ビビつてた何でだろ？

「やったねーゆうー」

「うん、ギター選びに付き合つてもらつてありがとう」

「いやいや、大丈夫だよ」

あれ？何か大事な事を忘れているような気がするけど…まあいいや

\*\*\*

平沢宅

家には憂が夕食の用意をして待っていてくれた流石憂姉

「よかったね、お姉ちゃん。ギター仲間ができて」

「うん！」

「うーん」

「どうしたの？ 優」

「いや、何か大事な事を忘れているような気がするんだよ」

「気のせいじゃない？」

「そうかもねー」

そんな事を言って笑っていたが…

「やばっ！……ギターだけ買って後のギターを弾くための道具を買

ってない！」

「「え？」」

その場にいる2人が驚く

「ちょっと買ってくるから！」

そう言って早々に部屋を出た

\*\*\*

15分後

「買って来たよ………」

今回は流石に疲れた

「あれ？皆もう食べてんの？」

「うん！そっだよ」

「嘘だ．．．．．食ってから行けば良かった」

腹がなっている

「まあいいや、今から食べられるんだし」

と言って座ると

「ごちそうさま」

「え？唯姉もう終わり？」

「うん、そっだけど」

「ごめん、私も」

「え？と言う事は一人で食うのか．．．．．何か寂しいな」

と言って誰かいてほしいよアピールしたけれど全く気づいてくれなかった。何で．．．．．

「はあゝ何か寂しいな」

今年最大級の虚しさがあった土曜日だった。これからは人と合わせようという事も学んだ。皆もこんな事にならないようにしようね！



**優！ギター購入！（後書き）**

7話目どうだったでしょうか 楽しんでいただけたら、嬉しいです。  
どうぞ次の話もよろしく！

夏休み前日！（前書き）

期末テスト終わったー！！ってことで、これからも続けて行きます  
んで！

## 夏休み前日！

中間テスト、期末テストも終わり季節は夏、蝉の音が夏を感じさせるな

「ゆうー私夏休み合宿行くんだ」

「え？そうなの？いいな」

「えへへ〜いいでしょ」

と言う事で夏休み前日

「ってか唯姉、まだテストと添い寝したりしてるの？」

「うん！最近は一太とも一緒に寝るよ」

この前の追試でとった奇跡といっても過言ではない唯姉の100点、今でもギー太と名付けたギターと寝たりしてる。そこまで嬉しかったんだろうな、憂姉は「今度は答案と添い寝！？」って言うて驚いてたけど僕には分かる！100点の凄さが！嬉しさが！分かるよ唯姉！

「優、最近ギター上手くなってきたね」

「そうかな〜唯姉の方が上手いと思うよ」

「そうかな〜ありがとーえへへ」

照れる唯姉、可愛いな（姉弟としてだよ！決して女性としてじゃないから！）

「ゆうー今さりげなく酷いこと思わなかった？」

「さ．．．．．さあなんの事でしょうか！」

「ふーん、まあいいや」

危ない！憂姉がいない今唯姉を止める事が僕には出来ない！と、そんな時

「あ、和ちゃんからだ」

「和さん！」

おおー凄い、唯姉を止める事が出来るもう1人の存在が今メールが来るとは！

「余ってるお菓子があるから、遊びに行くついでに持ってくるって」

「え？遊びに来るの？」

「うん、そうだよ。憂が友達の家遊びに行ってるから、夕食作ってくれるんだって！」

「へーそうなんだ」

とかいいながらも心でガッツポーズする僕、よし、これで唯姉になんかやられる事はなくなるし、唯姉が夕食作る事はまずない！

\*\*\*

数時間後

「やつほー和ちゃん」

「こんにちは、和さん」

「どうしたの優、疲れてる顔してるわね」

「ちょっと色々ありましてね．．．．」

和さんがすぐ来るとおもって油断してたら、女装させられた．．．  
．．．やっぱり憂姉も必要だね

「ちょっと優、こっち来て」

「え？なんですか？」

そう言っただけ姉から少し離れた所へ行っただけ言われた

「ちょっと優、また唯に女装させられたでしょう」

「え？わかるんですか？」

「当たり前よ、何年付き合ってると思うてるの？まあ男なんだし断れる力を持ちなさい」

「はい」

「まあ頑張rinaさい」

そんな事を言ってくれた、ありがとございます

「和ちゃん今日はどうする？」

「今日はご飯作りに来たのと、唯の勉強を見に来たから先に勉強しなさい」

「えー、先にご飯がいい」

「ダメよ」

「分かったよー」

と言ってしぶしぶ和さんについて行く唯姉、頑張って！

「何思ってるのよ優、一緒に勉強しなさい」

「あ、やっぱり」

ってか、心を読むなんてさすが和さんだなとか思いながら後を追った

\*\*\*

勉強後

「は〜疲れた〜」

「何言ってるのよ唯達、たかが3時間じゃないの」

和さんあなたは鬼ですか？

「鬼じゃないわよ」

読心術の天才だ…

「ま…まあとにかくご飯食べれるからいいんじゃない」

「そうだね〜」

なんとか話を逸らした……ダメだそんな事を考えると、読心術で見破られるダメだ！

「待ってて、今作るから」

「「はい」」

「あなた達本当に似てるわね」

「えへへーそうかなー」

凄く傷つく、まあ似ててもしょうがないか

\*\*\*

数十分後

「出来たわよ」

「うわー美味しそー」

ホントに豪華だなー憂姉と同じぐらい美味しそー

「ありがとう、さあおかわりもあるからどんどん食べて」

「はい」

と言って食べるとこれがまた美味しい

「美味しいよー和ちゃん」



「ホントに美味しいです」

「2人とも、ありがとう」

そんな事を言った後、自分の行く高校つまり桜々丘高校はどんな所か、唯姉は普段何してるのなどを聞いて夕食タイムはあっという間に終わった

「じゃあ私はこれで」

「えー、泊まって行ってよー和ちゃん」

「ダメよ制服のままだし」

「大丈夫だよ！」

と言って和さんに抱きつく唯姉

「ちょっと唯？優？どうしたの？」

抱きついた時、僕もその反動で和さんに抱きついてしまった、離れようとしたけど体が動かない

「全く．．．．この3姉妹は本当に人に抱きつくのが好きよね」

「姉妹じゃないです姉弟です！」

「その体制で言っても説得力ないわよ」

「うつ」

たしかに、和さんに抱きつくと気持ちいいけど……

「妹じゃないです!」

「はいはいとにかく離して」

「嫌です」

「はあ、なんなのよ」

「僕にも分からないですよ!ただ、なんかいいなって思っちゃうんですよね」

「そう、昔から抱きつくとすぐ寝ちゃうわよね、ってもう寝てるし」

「zzz……」

「無駄に抱きついてる力が強いわね」

\*\*\*

## 憂視点

こんにちは、平沢憂です。昨日は純ちゃんと勉強会でついでお泊まりしてしまいました。お姉ちゃん達、大丈夫かな？

「お姉ちゃん、優ただいま、夕食大丈夫だったー？」

あれ？返事がないまだ寝てるのかな？

「お姉ちゃん達ー」

リビングには和さんも混ぜて3人で仲良く眠っていましたお姉ちゃん達は可愛いです

「唯姉・・・・・・・・やめて・・・・・・・・」

優はどんなゆめを見てるんでしょうか、何か不思議ですね

\*\*\*

夢の中

「唯姉、和さんまでちょっと待ってください」

「逃がさないわよ」

「絶対、女装させてあげるんだから」

その笑顔が凄く怖いよ！あと、何か唯姉キャラ崩壊してる！

「う……っわーーーー！！！！」

その時にもう絶対に女装は断る！と思ったんだけど、夢の中だったんで全く覚えてなかったです！

## 夏休み前日！（後書き）

今回はちょっと長めにしてみました、どうだったでしょうか。感想アドバイスなどは非ください！次回からは夏休み編です！ではまた次回

夏休み！（前書き）

9話目です！よろしく！

夏休み！

「暇だ」

夏休み真っ最中。 本当なら唯姉と一緒にだらけてるはずなんだけど、あいにく今日は軽音部の合宿らしく、今日は憂姉と僕しかいない、唯姉がいないと結構暇だね

「優、外行つて来たら？」

憂姉が話しかけて来た

「何で」

「だって最近ずっとだらけてばかりじゃない」

そうだった。唯姉と一緒にだらけてばかりいたんだった

「お姉ちゃんは合宿で活動してるんだから少しは優も何かしようよ」

「うーん、だったら真司でも誘ってどっか行くか？」

と言って重い腰をあげたあゝ眠いな

「優、いつてらっしゃーい」

「いつて来ます」

そう言つて出掛けたのだが……

「え？遊べない？」

「ああ、夜から用事があってな、ごめん無理だわ」

「そうか…分かった」

と言って帰ろうとしたら

「ちょっと待って！」

「何？」

「これ見てくれ！」

「ん？これは…ライブのチケット？何でお前がこんなものを？」

JAZZ系のライブチケットだ日にちは今日だ

「友達からもらったんだけど、俺には見にいけないからさ、だからやるよ」

「ホントに？ありがとうございます！」

「どういたしまして」

「じゃあね、サンキュー」

そう言つて真司にお礼を言つてライブ会場へ急いだ。いやゝ得した気分だなゝそう思いながら歩いていると信号で人とぶつかつてチケ



ットを落としてしまった

「大丈夫ですか？」

「え？あ、はい」

見た目中1ぐらいの身長、長い髪をツインテールにしていた。うん、かわいいね唯姉が見たら絶対抱きつく程の可愛さだ。あれ？背中に何かある……あの形は…ギター？

「ギターやってるの？」

「そうですけど…まさかあなたもやってるんですか？」

「うん！お姉ちゃんの影響で」

意外だギターをやる人は見かけによらないってことだねそう思っているとツインテールの少女は僕のライブチケットを見ていた。どうしたんだろ

「このライブ行くんですか？」

「へ？うん、行くけど…」

「奇遇ですね！わたしもそのライブ見に行くんですよ」

これまた意外、ぶつかった人が同じ目的地なんて。運命を感じるな

「良かったら一緒に行かない？」

「いいですよ、私の名前は中野梓中3です!」

え!中3なの!

「えつと僕の名前は平沢優同じく中3です」

「同じ学年なんだね、よろしく優さん」

あ……さん付けされた…僕、女の子だと勘違いされてるよ、絶対

「えつと……優さんって僕って言うんだね。今時珍しいと思うよ」

「うん…」

言えなかった、僕が男だって、早く言わなきゃ行けないんだけど…

「優さんって高校何処に行く予定なの?」

「えつと桜々丘高校に行く予定」

「え?そうなの?私も桜々高校何なんだ!なんか運命的なのを感じるね」

なかなか話せない…そんな訳で、話せないままライブ会場についてしまった。ライブをやってる人達は一言で言うと、「すごかった」唯姉より絶対に上手い!と思う。中野さんはずっとシンケンな表情でライブに聞き入っていた、すごいな……。とか思ったり音楽に聞いたりすると、何時の間にか終わってしまっていた。帰り道で中野さんとメールアドレスを交換したりした

「優さんはどのバンドが1番良かった？」

「え？僕はやっぱり最初のバンドかな」

「私は10番目のバンド」

など会話していると、僕の家についた

「じゃあ、僕、この家だから」

「うん、じゃあね優さんまた今度」

と言って家の扉を明けると

「ただいま」  
「ゆうー」  
「うわっ！」

いきなり帰ってきていた唯姉が抱きつく

「唯姉ちょっと助けてキツイおまけに精神的にもきつい！」

「大丈夫だよー」

大丈夫じゃない！けど、まあいいか今は今で楽しもう！だけど何か伝えるのを忘れてたと思うのは気のせいだろうか…気のせいだと願いたい！





## 夏休み！（後書き）

どうだったでしょうか。間違い、感想、アドバイスなどよろしく

## バカンス！1（前書き）

注意！

今回は原作は全く関係ありません！完全オリジナルです

## バカンス！1

「楽しみだね！ゆうーと憂！」

「うん！そうだね！お姉ちゃん」

「うん！」

ここは飛行機の中だ。こんな飛行機に3人での理由はまあいろいろあるんだけど、1週間前に遡る。そこから話そう！

### 1週間前

「ゆうー大ニュースだよ！」

突然唯姉が帰ってきて言った。どうしたんだろ？

「何？唯姉」

「なんと……何とですね……………」

じらす唯姉、気になるなー

「早く言つてよー」

「分かったよーしょうがないなー。なんと！我が家平沢家は旅行する事になりました！」



「へ？」

いやいやいや、ないないないない。いきなり帰ってきてこれはないない！そしてあり得ない！

「唯姉悪い冗談はやめて」「本当だよ！」……………え？」

ホントなのか？憂姉まで驚いてるよ？

「どう言う事なの？お姉ちゃん」

憂姉も聞いてきた、そりゃ気になるよね

「実はですね…」

唯姉の話が長いので簡単に説明しよう！ムギちゃんと言う軽音部生がクジ引きで1等を当てて3人分の7泊8日の券を当てたらしいけど、その時は旅行らしく、自分は行けならしい。だからその時會った唯姉に渡した。僕が言いたい事は1つ！運よすぎ唯姉！

……………と言う事なのです！」

「長ったらしい説明ありがとう唯姉」

「長ったらしいは酷いよゆうー」

「けどどうするの？今はお父さん達だっているよ3人分しかチケットないじゃん」

「うーんそれは…」

「それは大丈夫だ（よ）！」

いきなりのお父さん達の出現！

「僕たちはその時パリに行ってるよ！だからいつてらっしゃーい」

仲良し夫婦だな…ホント

「ありがと～お父さん、お母さん」

「いやいや、じゃー！」

と言って去って行った

「良かったね！お姉ちゃん、優！」

「うん！」

と言う訳で冒頭シーンに戻る訳だ。ちなみにホテルとかはムギちゃんと言う人が別荘を用意してくれるらしい。何から何までありがとございます！

「しかしお姉ちゃん、優。寝坊したから危なかったよ」

「「ごめんなさーい」「」

憂姉には頭が上らない。

「もう少しでつくよ！憂！」

「そうだね！お姉ちゃん」

飛行場が見えてきた

「ゆうー楽しみだね！」

「うん！唯姉」

ハプニングがおきなければいいんだけど。お願いしますよ唯姉！

## バカンス！1（後書き）

ついに始まりました！バカンス編！軽音部キャラクターもでてきますのでよろしく！感想、アドバイスをよろしく！

## バカンス！2（前書き）

バカンス編です！

## バカンス！2

「で……………でかい!!」

「お姉ちゃん！ここなの？ホントに」

「うん！ホントだよ」

ただいま飛行場から別荘についたところ。ってか唯姉何でこんなに大きなところなのに、びっくりしないんだ？

「唯姉、どうして平気でいられるの？こんなに大きいのに」

「あーそれはねー合宿の時にこれくらい大きな別荘借りたんだよ」

すごいな唯姉！

「これでも小さい方ってムギちゃんが言ってた」

すごいなムギちゃん!! 憂姉も言葉が出てないよ！

「早く部屋に入ろう！旅行は1分、1分を大事にしなきゃ！」

「そうだね、憂姉も早く入ろう」

「う……………うん」

なかなか声が出せてなかったな憂姉

\*\*\*

「なかもでかい!!」

なかに入ってみると、これまたでかいベッドや部屋の数々、ムギちやんありがとうございます

「3人入るだけなら広すぎるね」

「ホントだよね」

「大丈夫だよー」

唯姉、あなたはお金持ち耐性がついてしまったんですか……

「別荘の周りにビーチがあるのもすごいね」

「うん！合宿も周りに海があっただよ！」

合宿の時に海．．．．．まさか！

「唯姉、合宿の時はあまり練習してなかったんじゃ．．．．．」

唯姉からギクツと言う効果音が聞こえる

「まさかぁー唯お姉ちゃんはちゃんとやってたよ！」

「お姉ちゃん．．．．．」

憂姉までもが唯姉に大丈夫なのサインを送っていた

「はぁ．．．まあいいや、とにかく次どうする？」

「私は．．．．．お姉ちゃん達がする事なら何でもいいよ」

「じゃあ僕は．．．．．」「はいはい！およぎたいです」．．．  
．．．唯姉」

散歩でもしよう！って言おうかなと思ってたのに唯姉．．．．．

「いいけど僕水着持って来てないよ？」

少し抵抗しよう！と思って言ったのだが．．．．．

「ふっふっふご覧あれ！この水着を！」

「あっ！それ僕の水着！」



どっから持って来たんだそれ！

「ほら、憂もあるよ」

「ありがとう、お姉ちゃん！」

素直に喜べるっていいな

「さあ泳ぎに行こうぜ！」

唯姉が男っぽい口調になって話す。よほど機嫌が良いな

「でもね、唯姉」

「どうしたの？」

ここで着替えようとしなくてくれますか？なんて言えるわけないでしょう！どんな中学生だってすごいイベントかもしれないけど、姉弟だし。けどやっぱりいいん……って僕！ダメだよそういう気持ちをもっちゃいつも言ってるけど人間としてマジでダメですから！ホントに

「トイレいつて来る」

「うん、行つてらっしゃい」

と言ってトイレへ向かう。危なかった、ホントに危なかったよ、あとちょっとで理性が崩壊するところだった。いやマジで危なかった。これ大事だから何回でも言うよ。

と言うわけで、終わった頃を見計らい唯姉達のいる所に戻った

「ゆうーさき行ってるよー」

「うん！」

と言う訳で僕は1人残されちょっと寂しい気持ちで着替えて唯姉達を追いかけた

\*\*\*

「どうしたの？優」

「いやね、ちょっと眩しくて」

憂姉達がと言うつけたしの言葉は1生口にならない言葉であろう。眩し過ぎる、あれだね、もうちょっと胸の辺りがね、いつもより全体的に唯姉達が女の子に見える（もともと女の子だけど）

「ゆうービーチバレーボールしようよ!」

「3人しかいないけどできるの?」

「できるよー、唯お姉ちゃんに任せなさい!」

と言う事で、唯姉&僕VS憂姉の対決になったのだが……

「強過ぎるよ憂姉!」

「もうちょっと手加減してね憂」

「お姉ちゃん達、だらしないな」

結果は僕達のぼろ負け。憂姉強過ぎ!

その後もスイカ割りしたり無人島ごっこしたりなんだりいろいろな事をしました

「いやー楽しかったね、憂、優」

「うんそつだねお姉ちゃん」

「ちょっと疲れたけどね、遊び過ぎて」

「まだまだだね！優！」

何が？

「とにかくもう遅いし夕食を作るか」

「憂へお願い」

憂姉にすがりつく唯姉、立場逆じゃね？

「いいけど．．．．．材料は？」

「「あっ！」」

と言う事で3人揃って買い物に行く事になりました。次回もよろしく！



## バカンス！2（後書き）

次回は多分、漣ちゃんと律ちゃんの登場！お楽しみに！感想、アド  
バイスもよろしく！

## バカンス！3（前書き）

バカンス編。今回は買い物に行きます！

### バカンス！3

「うわゝ結構広いなー」

「ここら辺は結構有名らしいからね」

食べ物を買ったく買ってなかった僕たち、そのために近くのショッピングセンターに買い物に行く事になった。

「見て、見てゝ」

子供のようにはしゃぐ唯姉、はぐれないかなー

「大丈夫？お姉ちゃん」

憂姉が心配してる。ホント憂姉は唯姉が好きだよなゝ

「大丈夫、大丈夫ゝ」

そう言う時って唯姉一番危ないでしょ、絶対に

「お姉ちゃん可愛いなー」

と呟く憂姉、いやいや憂姉も可愛いよ（家族としてね！家族として！）

「優、私お姉ちゃん見てるから、買って来てくれない？」

「いいけど、何を？」



「これとこれとこれ…」

「分かった、じゃあ行つて来るね」

と言つて行こうとしたら

「お姉ちゃん、遠くまで行かないでー」

ホントに世話好きだな憂姉は……

\*\*\*

「よし、これで最後だ」

と言つてやっとの事で、最後の食材をやつと見つけた、ってかどんだけ広いの？ここ。などと思つてると

「おーい唯ー」

唯姉、呼ばれてるよー

「唯つてば、おーい唯どうしたー」

あれ？唯姉ここにいないよなーじゃあ誰？……つて唯姉に見える人なんて……

「僕しかないじゃん！」

「おっす唯」

カチューシャの人が僕を唯姉と間違えている

「僕は唯じゃないです！優です！」

「え？優なのか？つてかお前どんだけ女装好きなんだよ」

「違います！これはですねー」

「ハイハイ、分かった分かった」

「自分から聞いて来たのにその態度はないでしょ！」

唯姉と同じで突っ込みポイント満載の人だな

「どうして唯姉と友達の人がここにいるんですか！」

問題はそこだよ！

「私も聞きたいわ！」

「逆ギレ!?!」

ホントに突っ込みポイント満載の人だな

「とにかく! 私についてこい!」

「ちょっ! 耳を引つ張らないで……」

あと、買い物どうするんですか?と聞きたいんだけど……もうダメだな……

\*\*\*

レストラン

「連れて来たぞー」

「ほぼ無理やりじゃないですか!」

半ば強引にレストランまで引つ張られた

「律っちゃんナイス!」

「律、痛そうじゃないか、離してやれ」

と、黒髪の人が言った

「あーごめん、ごめん」

と言ってやっとの事で離してくれた

ありがとうございます！黒髪の人さん！

「ところで漣ちゃんは何で？ここにいるの？」

「それはだなー漣がここに行きたい行きたい！って言うてきかん」  
捏造すんな！」……軽いジョークなのに」

自業自得だと思いますよ……

「ホントはムギに唯達も行ってるから行って来たらって言われたから私も最初は断ったんだけど……」

「私が漣の分までもらったんだぜ！」

そう言う事ですか……

「ところであなた達の名前は何て言うんですか」

「あ、自己紹介してなかったっけ」

「そっだな、今の内に自己紹介するか」

「私の名前は田井中 律！軽音部部长でドラム担当！」

「え？部長なんですか？！」

「ほー、優君やそれは喧嘩を売ってるということでもいいんだね？」

「やばっ！心の声が！」

「いやね、律さんが部長なんて凄くなって」

「優、それ言い訳になってない……」

「あ、ソウデスネ」

「覚悟しろよー優！……」

と言って襲われそうになった時

「やめる律、何やってんだ」

律さんの首根っこをつかむ漑さん

「チエーいじるとどうなるか見て見たかったんだけどなー」

と言って諦めてくれた。ありがとう黒髪の人さん！

「私の名前は秋山 漑 軽音部ベース担当だ」

「じゃあありがとうございませう！漑さん！」

「ところで唯、どこに泊まってるんだ？」

律さんが聞いてきた

「ムギちゃんの別荘！」

唯姉が答えた。

「ホントか！いいなー私達なんて格安ホテルだぜー」

「どうせなら一緒にくる？」

唯姉の突拍子な発言！

「え！ホントか！」

「いいですよ、三人では広すぎますし」

「分かった！じゃあホテルの予約をキャンセルしてくる」

と言っていきなりダッシュ

「どこに居るんだ？」

と言う、残された零さんの発言

「えーと」「ここをこう曲がって信号を……」「ありがとう憂々」

唯姉がおどしてると憂姉が答えた。流石は憂姉！

「ありがとう！じゃあそこに行くからな！」

そう言って律さんを追いかける漣さんやっぱり心配なのかな

\*\*\*

「おい優〜律ちゃんたちが来たよ〜」

「え？もう来たの？」

そう言っ外に出る僕

「おじゃましてーす」

「邪魔するぞー」

「「いらつしゃーい」」

唯姉と僕が答える

「唯、憂さんは？」

「今、料理を作ってるよ！」

「やっぱり唯は作ってないか」

ボソッと澪さんが言う聞こえてますよ！

「失礼な！私も作ったよ！」

「お！マジで？何を」

「このカレーに！」

「おーすげえ！」

いや、それは唯姉……

「カレーのルーを入れました！」

やっぱり……

「私の言っただすげえ！を返せ！」

こんなやりとり、またいつかあるような気がする……



「優君は何か作ってるのか？」

「僕も作りましたよ！」

「え？ホントに」

「なんですか…その優君は唯に似てる！見たいな感じは！まあ確かに  
……

「このサラダに！トマトを乗せました」

「……唯姉に似てるんだけどね

「「やっぱり唯に似てるな」」

ハモって言われた……否定できないのだが

「おーすげえ！」

テーブルには豪華な料理がたくさん！

「気合入れて作っちゃいました」

憂姉が言う、だけどホントにまたいつかこんなやり取りありそうな感じがするな……

「美味しいよ憂！ホントに！」

「えへへ〜ありがとうお姉ちゃん」

デレてる憂姉可愛いなー（家族から見ても！家族から！）

「いいお嫁になれると思うよ憂姉」

「優もありがと〜」

さらにデレる憂姉

「肝試しを……やろう！」

急な律さんの発言！

「僕は遠慮しますよ」

「私も遠慮しとく」

その答えに律さんは

「へ〜優や澪はお化け、怖いんだ〜」

その言い方にちょっとイラっとしてしまい

「いいよ、やってやろうじゃない！」

と言ってしまった。裏で律さんがガッツポーズしてるのも気づかずに。こんなシーンもいつかあるだろうなー、そんな気がする。と言う事で次回もよろしく！

### バカンス！3（後書き）

次回は予定ですと肝試し編とあずにゃんとの出会いをやらうと思う  
てます！感想アドバイスもよろしく！

## バカンス！4（前書き）

バカンス編です！今回あずにゃん登場！すみません作者の文章力のなさのせいで、肝試し編はつぎの話と言う事になってしまいましたホントにすみません！

## バカンス！4

「いやゝ暇だー」

ただいま浮浪者みたいに街中をうろろろしてます。まあこれも全て唯姉のせいなんだが

ゝ回想ゝ

「今日も泳ぐぜ！」

「おーっ！ー！」

律さんが泳ぐと言うのを待ってたかのように唯姉がおーっ！と叫ぶ最近毎日これの繰り返しだよ、まあ楽しいんだけど……

「あっ！」

唯姉がテーブルに足をぶつける

「大丈夫？唯姉」

「うん、大丈夫だよ」

唯姉は大丈夫、そうなのだが！

「僕の……水着……」

テーブルにあった醤油がこぼれて水着にたれている

「あつ！ごめんゴメン！」

流石に気づきオロオロし出す唯姉。なんだかこっちが可哀想になつてきた…

「唯姉、大丈夫だから行つてきていいよ」

あーあ、言っちゃったよ

「ホント？」

途端にオロオロしていた足と手が止まり、涙ぐんだ目でこっちを見て来る。効果抜群だね、これは

「うん、だから僕の分まで遊んできて」

その言葉を聞き笑顔になった。この顔も効果抜群

「おーい唯！なーにやってんだ？」

律さんが唯に言う

「大丈夫！今行くから。じゃあね優！ゴメン！」

と言って律さんの所に行つてしまった。ちょっと待て！今日憂姉どっかに行つてていないよ！後漕さんも！どうしょ…

く回想終了く

「はぁーどうするかなー」

と言っ て行くあてもなく歩いて いると

「たい焼き食べたいな」

目の前にはたい焼き屋さんが僕の食欲を際限なく誘ってくる。あーもう！

「並ぼう！」

残り少ないお小遣いを手にしてたい焼き屋さんに並ぶんだけど……

「まだかな」

並ぶ時間がかく長く！少し苛立ちながら待っていると

「長いなー待ってる時間」

あれ？後ろから聞いた事のある声がもしかして……

「梓さん？」

「あれ？優」

後ろに居たのは可愛らしい姿の梓さんが立っていた

「久しぶり」

そう言っ て梓さんが言っ



「うん、久しぶり」

と言っても夏休みの最初の頃に会ったんだけど……

「なんでここにいるの？」

と、梓さんが聞いてきた

「えつと……唯ん……いや、お姉ちゃん達と一緒に」

「へー、そうなんだ、なんか偶然じゃないような気がするね」

「本当だね」

小説による非常に都合の良い展開だ、これは絶対

「なんか言った、優？」

「いや、何も。ところでどうして梓さんはここに？」

「家族で来たんだ、今日は一人だけど」

「へー、僕と一緒にだね。今日は一人なんだ」

ホント今回はご都合主義満載だね……

そんな事を思いながらやつとの事でたい焼きを買った。どんだけ人  
気なんだこの店……

「ところで優のお姉ちゃんはギター上手いの？」

いきなり答えにくい質問来ました！

「へ？うんまあ上手いと思うよ」

「？そうなんだ」

なんとか誤魔化しに成功！良し

梓さんのホテルまで歩いていると

「どうしたの？」

「へ？いやっ、何でもないよ！」

いや、何かあるでしょ！そう思って梓さんをしばらく見てると

……カンペキ僕のたい焼きを見てるよね。

「あの……食う？」

と言ったたい焼きを差し出すと

「ホント？」

と言って目を輝かせる、ここら辺は唯姉とかなり似てるな

「あ……ありがとう」

そう言って僕のたい焼きを取って食べた途端に、梓さんの顔が笑顔になる。唯姉と憂姉と同じで屈託のない笑顔だな

「そんなたい焼き好きなんだね」

コクツと無言でうなづく梓さん。これはどんな人間でも100%可愛いーと言っ頷き方だね、絶対

「じゃあ、泊まってるホテルここだから」

「うん、じゃあねまたいつか」

「うん、たい焼きありがとう」

と言って帰って行った。余程たい焼きが嬉しかったのかな……

\*\*\*

別荘

「ふ、待ってたよ優！」

と僕が帰ってきた途端に話し出す唯姉

「よし！優が帰って来た事だし始めよう！肝試し大会を！」

え？本当にやんの？

「グループは私&唯と憂さん&優&澪のグループです異議はありませんか？」

「大有りですよ！律さん！」

「絶対ダメだ！」

と言って僕と優が叫ぶが

「異議はなし！と言う事で」

「聞いてないだろ！」

恐ろしいほどにハモった僕と澪さん

「先にいつてくる」

「人の話を聞け〜！」

漣さんは粘るけど、僕はもう諦めた……

と言うわけで第一回！肝試し大会が始まったのだった



## バカンス！4（後書き）

来週は今度こそ肝試し編です！ムギちゃんも出てくるんでよろしく  
お願いします！

## バカンス！5（前書き）

更新遅れてすいません！なにしろ林間学校などがあってなかなか更新出来ずにいました。では気を取り直してどうぞ！



## バカンス！5

「ホントにやるんですか？律さん？」

「あつたりまえだー！やんなくてどうするー！」

どうもしません！と、心の中で突っ込む。

ここは別荘の外れにある森。どうしてこんなに都合よくこんな森があるんだろ。流石ご都合主義！最近たくさんあるな

「優！気合を入れて！大丈夫だよ優なら！」

「ありがとう唯姉」

唯姉ってこんな時に有難いんだよなー全くその有り難さを他に回して欲しいよ……

「あー優照れてる」

「へ？」

え？僕が照れてるの？なんでだろう、見間違いじゃないの？

「本当だー優照れてるぞ」

「律さんまで！」

「私の言葉がそんなに嬉しかった？」

「唯姉まで！」

「私も照れてると思う」

「澪さん！！」

僕はまたもや唯姉と同じ事をしてしまったのか……！

「「本当にこの3姉妹は照れるよな」」

「姉妹じゃないです！姉弟です！」

律さんと澪さんの言葉にすかさず突っ込む僕。僕の立場って一体……

「はいはい、そうだな」

「直してくださいよ！」

そんな事を言っただけに皆に姉妹と姉弟の違いについて説明する。うん、分かってたよ！皆が聞いてないのは！

「さあ、優一さつさと始めるぞ」

僕の教えを無視して律さんが皆に話す

「ちょっと待ってよ律ちゃん、あれ見て！」

唯姉が空を指さす。へ？こんな時にボケをかますのかな？唯姉

「あ！すげえ！何だあれ！」

「律さんまでふざけないでくださいよー分かっていますよ！嘘をついてるぐらい」

「嫌、違うと思う。だってあれ」

へ？零さんまで、あー皆揃ってグルかー僕に嘘はつけn……

「「「「えーーーーー！！！！」」」」7

五人揃って声を上げる、皆は幻覚を見てるのか？僕はそう思った。

「なんでこっちに飛行機が来てんの！？」

そう、こっちに見るからに自家用ジェットが近づいて来ているのだ！

「すげえ……」

今回の律さんのすげえにびっくりマークがついていない。それ程感動しているんだろーな

「あー別荘の近くに飛行機が降りたよ」

唯姉が別荘の方角を指で指す。まさかあの……

「唯、こんな事が出来そうな私たちの友達はある人ぐらいしかないないな……」

「そうだね！律ちゃん」

と言った後、声を合わせて

「ムギ（ちゃん）だ！！！！」

ナイスなハモリだね。うん、僕もそう思ってたよ。だってあんな大きな別荘持っているんだから

「唯！行くぞ」

「分かりました！律ちゃん隊長！」

そう言つて二人とも別荘へ向かう。ってか律ちゃん隊長ってなんだ？……

「優、行こう？」

「へ？あ、うん」

憂に言われて走った

「ちょっと待ってくれよー」

と言つた瀧さんの声が聞こえたのは気のせいかな？

\*\*\*

別荘

「やっぱりムギちゃんだー」

と言って駆け寄る唯姉とそれに続く律さんと澪さん。何か軽音部の人達が飛行機の前で話していると何かいい絵になりそうな気がするの  
は僕だけかな？

「あ、憂ちゃん達も」

「「どうも」「」

僕と憂姉がおじぎする。ってかしないといけないような気がする

「あら？まだ優君は唯ちゃん似の髪型にしてるの？」

「ってかまるつきり同じだけどな」

律さんが呟くけど聞こえますよ！だがあえてスルーしよう。また  
なんか言われたら面倒くさい

「えーとですねいろいろありまして、えーとムギさん？」

そう言えばムギさんの本名を僕は知らなかった

「あ！そう言えば私の名前言ってなかったわ！私の名前は琴吹 紬、よろしく」

「あ、はいよろしくお願いします。 紬さん」

そう返事をした。よかったー言っていないことを紬さんが忘れてたらどうしようかと思った

「よーし！軽音部全員と平沢一家が揃ったところで！肝試し大会を始めるぞ」

と律さんが叫んで森の中へ入って行った

「あ！待ってよー律ちゃん！」

そう言っただけ姉が追う

「えーとだな、ムギ……」

湊さんは必死に紬さんに今までの状況を伝えた。そのおかげで、何とか分かった顔をした紬さん。ご苦労様ですね

\*\*\*

森

「ではムギが来たところで！もう一度チーム発表だ！」

どうせ、律さんが決めたに決まってる

「では！作者のコイン投げで決まったのは……」

作者か！その発想はなかった……っていいのかこの話して

「唯&私&ムギと優&憂ちゃん&澪！のチームです」

はいはい……ってこれホントにコイン投げたか作者！

「因みに作者によればマジでコイン投げで決めたので！だそうだよ」

「そっなんですか……」

作者を信じてやってください

「つーことで私達から行つて来るんで」

「行つて来まーす」

「次、頑張つてね」

僕には今、全ての声が皮肉に聞こえた

「優、どうしたの？顔色悪いけど」

「へ？だ……大丈夫だよ！それより澪さんは大丈夫なの？」

冗談混じりで言ったのだから

「ど……どうしょー！どうしょー！」

完璧動揺してるね、これは僕よりダメかも」

「澪さんより優なんて小学校でお姉ちゃん達のクラスがやったお化け屋敷で気絶して大騒ぎになったじゃない」

「へ？な…何のことでしょう？か心当たりが全くない」

「ホントかなー」

と、無邪気に笑ってる憂姉。この笑顔、僕は好きだな

「さあ行こうよ優、ほら、澪さんも」



「ん？ああ行くか」

あれ？澪さん動揺が直って……ないか足がかなり震えてる

\*\*\*

お墓

「ち……中学生にもなって肝試しはねー」

「そ……そうだよな、わ……私達なんてもう高校生だし」

ただいま墓の最期の方らへん。恐怖がピークに達する所だ証拠として

「優、澪さん私の手が痛いんですけど」

と言う状況、憂姉の手は暖かい。ホッとする

「よし、もう少しでござー」 「キヤハハハハハハハハ」……へ？」

なにこの声死神の声？まさかのここで？え？ないないない澪さん何か立ってじつとしてるおーい澪さーん

「キヤハハハハハハハハハハ」

と言う声で木の上からてるてる坊主みたいな怪物が落ちて来た次の瞬間

「「「うわああああああああああああああああああ」」」

僕は（多分澪さんも）記憶が途切れてしまった

\*\*\*

憂視点

こんばんは、平沢憂です。今は気絶した優と澪さんを見えています

「ホントにこいつら怖がりだなーでかいてるてる坊主見たぐらいで」

「大丈夫かしら」

「大丈夫だよー小学生の時も大丈夫だったし」

お姉ちゃんだけ考えが違う気が……お姉ちゃんらしいな

「助けて……」

「気絶したのに二人とも夢見てやがる」

「何か可愛いよね」

「ホントよね」

ホントに大丈夫なのかな……お姉ちゃん

\*\*\*

夢の中

「キヤハハハハハハハハハハ」

「キヤハハハハハハハハハ」

「キヤハハハハハハハハハハ」

「え？ここ何処？唯姉！皆！」

「この際誰でもいいから……」

助けて……マジでこれはもうダメかも零さんしか近くにいない……

[illegible]

「助けてー」

この二人の声は多分天まで届いたと思う。それくらい大きな声だった。ってか誰か助けて――――



## バカンス！5（後書き）

バカンス編も終わりに近づいて来ました。多分バカンス編も次で終わりです。今回は全く上手く出来た自信がないので、アドバイスなどお願いします

## バカンス！6（前書き）

バカンス編最終話です！これからは原作にそって書いていきます（  
たまにオリジナル書くけど）

## バカンス！6

「ついに今日は家に帰る日だね、ゆうー」

「そうだね、律さんと澪さんも帰っちゃったし細さんなんて自家用ジェットで帰っていったもんね」

「お姉ちゃんと優、喋ってばかりいないで手伝ってよ」

今日は待ち遠しくもあつたし待ち遠しくなかった家に帰る日だ、というわけで僕達平沢家は帰りの用意の確認をしている（とくに憂姉が）

「「分かったよ」」

かといって憂姉ばかりに任せる事は出来ないので、渋々重い腰を上げて僕と唯姉は手伝った……のだが

「もうダメだー力が出ない」

すぐさま唯姉がギブアップ！ってかまだ一分もたってないよね唯姉！

「しょうがないなーお姉ちゃんは休んでて」

え？いいのか憂姉！

「あ！僕も急に胸が痛くなってきた！憂姉休んだ「ダメ！」……はいい」



くそー結構な演技力だと思ったのだけど即効で否定された！唯姉はホントに疲れたような顔をしている。唯姉は嘘をつけないタイプだからホントなんだろ

「ところで唯姉、あの肝試し大会のてるてる坊主は何処で用意したの？」

肝試し大会で僕と澪さんは恥ずかしながらも、笑うてるてる坊主に気絶してしまった。この記憶は永遠になかった事にしたいのだけど、コレだけは聞いておきたかった。だって気になるし！

「あーそれはね、律ちゃんがあらかじめムギちゃんに電話しておいたらしいよ。律ちゃんはてるてる坊主を、ムギちゃんはあるきみのわるい声を担当した。って律ちゃんが言ってた！」

あーだから紬さんに澪さんが必死に説明してたのをすぐさま理解したのか成る程。という事はもともと分かってたんだな、唯姉はあるてるてる坊主の事を

「お姉ちゃん体力はもどった？」

「はい！この通り！」

と言って元気なポーズになったのだが

「じゃああつちのゴミ片付けてくれない？」

と、憂姉が言つと

「ああ急に元気が……」

と言って枯れた花みたいにぱたり、と倒れる。どんだけ現金なんだ  
唯姉

\*\*\*

「ハアハア」

「ギリギリセーフ！」

「ホントにギリギリだね」

今は掃除も終わり、新幹線に乗った所だ、しかし、この前には唯姉が掃除中に寝てそれにつられてみんな寝坊してしまって遅れそうになってしまった。なので僕達三人とも

ダッシュして疲れ果てている

「唯姉そんなに体力あるなら……掃除やってよ」

ごもつともな意見だ100人中100人が疑問に思うと思う

「それはね、私はいざという時にしか力が出せないのです!」

と、声を張り上げ言う、そこは声を張り上げるところではないと思うよ唯姉

「唯姉、自分でいつでも力を出せるために努力してね」

「分かってるよー」

絶対に分かってないな、唯姉

「まあまあ、乗れたからいいよ」

ここで上手く憂姉がまとめる、

「そうだね」

いつも通りの展開だ

「それにしてもいろいろあったねー」

「うん、スイカ割りにショッピング、バレーボールや肝試し、そして泳ぎ泳ぎ泳ぎ!」

唯姉には泳いだのが一番楽しかったんだな

「ゆうーと憂、またこれたらいいね」

笑顔100%で唯姉が言う、その答えに僕と憂姉は声を合わせて100%の笑顔で言った

「うん!!!」

この答えは今までの僕の人生で一番ハッキリとした言葉だと思う

\*\*\*

「もつそろそろだね」

「うん、なんかすごく久しぶりって感じだね」

もう後五分で家に着く、そんな時

「ゆうー君」

その声に振り返ると真司が見た事もない笑顔でたっていた

「久しぶり、突然だけどちょっと近くの公園までいいかな」

真司がおかしい

「どうしたんだよ、口調がおかしいぞ」

「まあとにかく来い？」

「ちょっと待てって！」

目が笑っていない真司に連れ去られて唯姉達を置いて行ってしまった。唯姉達はとすると

「人気者だね、ゆうーは」

「ホントだね、先に帰ってご飯作ろう」

とか言って呑気に帰って行った、誰か僕の危険に気づいてくれる人は……いない

\*\*\*

「うわ！皆」

真司に連れ去られて来た公園には僕のクラスメイトに他校の中学生がいた

「おい、てめえこの前中野さんと一緒にいただろ。たい焼き屋さんに」

他校の中学生が話す

「そうだけど、どうしたんですか？」

初めて話す人なので敬語で

「ほおーという事は平沢さんと遊び中野さんとも遊ぶ人か……」

今度は真司が独り言のように話す

「そうだけど、どうしたんだよ真司まで」

「わからないのか？だったら教えてやる」

今度は他校の中学生が

「それは我が校のアイドル中野さんと楽しく遊び！」

「我が校のアイドル平沢さんとも楽しく遊んだ」

皆の目に怒気がこもるちよっといったいどうした

「「「「「「「「「「これがどういう事なのか、体で味あわせてやる！」「「「「「「「「「

近づいて来る真司達、僕も後ろに下がる

「ちよっと待て！中野さんは僕の友達だし、憂姉はお姉ちゃんだよ」

この必死の声は真司達の心には届かず

「「「「「「「「「「問答無用！死ね——————」「「「「「

「助けてくれ——ちよっと待て！話し合おうって近づくな真司！ちよっと待ってください——いい」

その後公園に叫び越えが響いたのは言うまでもないよね！



## バカンス！6（後書き）

ついに終わりました！次の優は主人公補正で、怪我は治っているの  
で心配しなくても大丈夫です！感想、アドバイスよろしく願います

全く関係ないですけど唯のキャラソン『ギー太に首ったけ』っていい  
ですね！テンポがイイです！是非聞いてない人は聞いてみては  
いかがでしょうか！

## 恋人ごっこ！憂編1（前書き）

またオリジナルです。今回は二話完結。これ、ずっとやりたいと思  
ってたんだよな！

## 恋人ごっこ！憂編 1

「優、入るよー」

「いいよ」

紬さんの別荘から帰ってきてただいまちょうど一週間が経った。正直言つて暇すぎる！そんな時憂姉が入ってきたのが始まりだった

「何？」

「えつと言いつらいんだけど……」

「え？言いつらいお金貸して欲しいとか？」

「いや、違うんだけど……」

そう言つて頬を紅くする。これ結構レアものじゃない？可愛い！つとそんな事考えてる場合じゃないわ

「どうしたの？憂姉」

そう僕が言つと憂姉が何かを覚悟したように目を明るくさせて僕に衝撃的な事を言った

「恋人になつてください！」

ああーそんな事かいいよ……って



「うん、分かった!」

ここまでは良かったホントにここまでは良かったが、僕は次の憂姉の言葉で言葉を失ってしまった

「このメモを見て」

「何?」

と言ってメモを見た、すると

「……………」

「ちょっと、優!お姉ちゃん、優が倒れたー!」

そこから全く記憶がない何故かというメモにはこう書いてあったからなんだ

メモ

公園でキス

\*\*\*

ってな訳でデート当日。最初に駅前で僕が待ってるという設定だ

「ごめーん待った」

おお、眩しい、眩しすぎる程の憂姉の笑顔

「僕も今来た所だよ憂」

初めてお姉ちゃん達を呼び捨てで呼んだ気がする

「どこ行く？憂」

と言って手を繋いだ。なんか久しぶりだなこの感覚小学5年生ぐらいから恥ずかしくてやんなくなっただけならー唯姉はたまに今でもして来るけど

「えっと、映画館！」

「分かった」

そう言って映画館へ行った。映画館は祝日だけあって凄く混んでいる

「なににする？決めていいよ」

と、僕が言ったのは間違いだったかと次の瞬間後悔した

「あれにする」

憂姉はホラー映画を指したのだ。いや、ホントに憂姉は僕をどうしたいんだろうか

「へ？……うん、いいよ」

「どうしたの？」

と言って顔を近づけて言う、ちょっと憂姉近いよ。近くにいる男子の目が痛い。ってか絶対分かってるでしょ！

「行こう！まだデートは始まったばかりだよ！」

と言って僕の手を引っ張り映画のシアターへ向かう。そうだ、まだ始まったばかりなんだよな。コレも憂姉の魔の手から守るため！頑張れ、僕！

「うん！」

そう言って憂姉の手を強く握りしめてシアターへ向かった





## 恋人ごっこ！憂編1（後書き）

はい、これ以上書くと文字数が多くなり編集の時大変になるんでここまでという事で。次回はついに憂とのデート本格編！ぜひ楽しみにしてくれると嬉しいです！では！

## 恋人ごっこ！憂編2（前書き）

今回で恋人ごっこ！憂編は完結です。けいおん！の原作に夏休みネタが少ないので次もオリジナルです。

## 恋人ごっこ！憂編2

「あゝ楽しかった」

「し……死ぬかと思った」

ただいまホラー映画が終わったあと、感想は怖かった。うん、怖かった途中で「うわああああ！」と叫んで前後の人達に睨まれてしまった。そして憂姉に抱きついたりなど彼氏、彼女としては全く逆だ。男として恥ずかしいーってかあれでP G I 1 2ってあり得ない！怖すぎだと思う

「次どこ行く？」

憂姉が話しかけてきた。そうだった今デート中だった。デートに集中しないと！

「喫茶店とかどう？」

恋人と言えば喫茶店だと思う……って思ってるのって僕だけ？

「うん！」

おお……凄まじい笑顔……眩しすぎる

\*\*\*

喫茶店

「映画どうだった？」

喫茶店に着いた途端この話題を出してきた憂姉

「え？……面白かったよ！特にあのシーンとかが」

と言ってるけど全く思い出したくもない映画だった。大変だな……  
恋人役も

「へーそうなんだー」

憂姉！そのにやけ顔やめて！

「こちらがイチゴパフェでございます」

しばらくすると店員さんが頼んでいたイチゴパフェを持ってきた

「うわゝ美味しそー」

憂姉が声に出して感嘆している。ホントに美味しそうだ

「はい」

いきなり僕の目の前にスプーンが現れた

「あの……憂姉、これって……なに？」

「何って恋人同士だとかこういう事するのが普通じゃないの？」

「へえーそうなんだ」

って出来る訳ないじゃないか！

「はい、アーン」

憂姉はずっと僕にスプーンを近づけている。憂姉ってこんな大胆な子でしたっけ？ええい！こうなりやも  
ういいや。どうにでもなれ！

パクッ

「美味しいよ、憂」

最大級のスマイルで言う

「ほんと？ありがとー」

こりやどうみても周りにはただのバカカップルにしか絶対見えてないよ！

その後はこつちがやらされて結構精神が持たなかったよ。うん、危なかった、食べるたびに笑顔を見せるんだもん憂姉

その後もゲーセンでプリクラを撮ったりなんだりと結構いろんな事をしたりした。結構いろんな事が出来たけどある事が頭の中から離れなかった

それは公園でのキスだ。これを公衆の前でやるなんて僕にはそこまでする勇気がない。しかも、姉弟で考えるだけで結構な恥ずかしさ

「そろそろ帰る時間だねど……どこかいく？優」

憂姉も流石に緊張してる見たいだ

「こ……公園でも行く？」

「う……うん／＼／」

自分もなんだけどね

\*\*\*

## 公園

「どうしょっか」

ただいま夜の公園。カップルが増えて来る時間だ。いくらか憂姉は落ち着いてきたらしいけど自分は全く落ち着けない

「と……とりあえずベンチにでも座ろう」

と言って噴水前のベンチに座ったキスするためには絶好のポイントだと思う

「えっと……」

言葉が全くでてこない。完璧に頭がパニックにおちいつてる。どうすればいいんだろ？

「お姉ちゃんの時みたいいつもの調子で」

小声で憂姉がアドバイスしてくれた。いつもの様に……唯姉みたいに……よしっ！唯姉ありがとう！自信が湧いてきた！





さっきからデレまくってる憂姉

「おい、大丈夫ー」

ダメだ全く気づいてない

「帰るよー」

しょうがないな、おぶって帰るか

「よいしょと」

うつ！「あれ」の感触が背中に頑張れ！俺の理性

「はぁ……憂姉をおぶって帰るのは初めてだな」

昔はよくおぶってもらったっけ。憂姉は昔から世話好きだったからな。みんな変わってないんだね。変わってる様に見えて

「う……うん？」

「あ、起きた？憂姉」

「うん、あっそう言えばキスの事……」

「左のほっぺたにしたよ」

「そっなの？！」

そう言つて左ほつぺたをつねったり触ったりしてる憂姉

「優、出来たんだねキス」

「うん、えへへありがとう」

何故かデレる僕その時

チュッ

「へ？」

何かが僕の右ほつぺたに……

「えへへ、お返しだよ」

憂姉が僕の右ほっぺたにキスをしてきた

「帰ろ、優多分お姉ちゃんお腹空かせてまってるよ」

さっきの事がなかったかの様にする憂姉

「そうだね」

「早くいこ！」

珍しく憂姉が子供の様に走り出す

「ちよっ！待ってよ憂姉」

そう言っ僕は憂姉を追いかけた

因みにその後、Oは諦めたらしい（キスを見て）

\*\*\*

「今回私の出番なし?!」

「ドンマイ唯姉、次は出番あるから」

「そうなの?!よし頑張るぞ」

次回もよろしくお願いします!



## 恋人ごっこ！憂編2（後書き）

今回唯だせなくてすみませんでしたー！！次は唯活躍すると思んで  
よろしく願いします！感想、アドバイスよろしく願いします

## 宿題！（前書き）

夏休み編も今回で終わりです。次からは日常編に戻ります

宿題！

「あーだるいよ」

「同じく」

「お姉ちゃん、優ぐーたらしないの」

ただいま夏休み最終日。凄くだるい日だ、ちなみに僕の部屋

「「ういー（ねえー）アイスちょーだい」

「だーめ朝からアイスなんて体に悪いよ」

「「えー」」

唯姉と声を揃えてブーイング

「全くお姉ちゃん達、しょうがないな」

「「えへへ」」

そして共にデレたりなんだりしたりした。あーこんな日がいつまでも続けばいいな、と思った矢先

「いてっ」

ダンスに足をぶつけてしまった。続いて棚の上から荷物が……



どサッ、どサッ、どサッ、どサッ、どサッ、どサッ、どサッ、どサッ、どサッ、どサッ

「いてっ、いてっ、いてっ、いてっ、いてっ、いてっ、いてっ、いてっ、いてっ、いてっ」

どンドン上から荷物が落ちて来る

「大丈夫？ ゆうー」

唯姉が駆け寄る

「あはは、何とかね」

そう、何とかだった

「あれ？ これなんだ？」

見慣れない教材を取る。するとそこには……

「え？ ま… まさかねー」

落ちて来た荷物をあさると色々なものが出て来たけど、ぼくの目には数冊のノートしか映ってなかった。その題名はというと……

僕・私の日記、漢字ノート、数学完全問題集、自由研究の進め、  
e  
tc……

「これってもしかして……あははは」

そう、全く手をつけてなかった物……夏休みの宿題だったんだ！！

残り時間二十時間

\*\*\*

「まず自由研究から……とな」

それから約三十分後、僕は机の上に有る１０円玉に酢をつけていた

「よし綺麗になった」

と言って写真を撮る。今僕は時間がない時にやる実験の一つ「十円玉を綺麗にする方法」に手を出していた。憂姉は海に行ってる時やったらしい。そんな時間あったのか？頼んでも手伝ってくれなかった。

唯姉はダメだ。絶対何も手伝いそうにない、ってか高校生って夏休みの宿題ないのか？

「よし、後は醤油つと……実験終了!」

速攻で自由研究の実験を終わらせてたのだが……

「問題は……レポートだな」

大事なのは、レポートをどれだけ速く書けるかに自由研究はかかっているのだ!

「僕のペンを書く速さを見せてあげるよ!」

誰もいないのだが、まあそんな事はどうだっていいんだ

「ハアアアアアア」

書くための集中をする、そして……

「ダアアアアアアア」

持つてる力の全てを使って書く、書く、書く、その時間三十分だったのだけど……

「あつ!醤油が!」

そう、近くにある醤油をこぼしてしまった。ちよつとこれはヤバイ

「レポート全滅だー」

それから立ち直るのに10分もう一度書くのに一時間、合計2時間

40分、残り時間17時間20分やバイ大幅にタイムロス！

\*\*\*

「次は……美術か」

絵の具で絵を描くというよくある宿題、当然憂姉は見せてくれなかった。仕方がないので、頑張ろうと思ったのだが……

「ダメだ！俺には描く才能がない」

しかし、約十分で現実逃避

「風が……心地いいな」

「優、現実逃避はダメだよ！」

「はっ！そつだ僕はやらなければ美術の宿題をしなきゃ！」

二十分後、現実に戻ってきた僕は一時間かけて（憂姉が手伝ってくれた）宿題を終わらせた

今回一時間三十分、残り時間十五時間五十分。結構取り戻したぜ！

\*\*\*

その後十三時間五十分かけて（5時間は寝てた）残り一つ。その残り一つが……

「日記なんだよな！」

そう、我ら中学生の天敵「日記」だったんだ。これは終わらせようが僕には全くない。という事で、唯姉と憂姉に協力を頼んだ

ところ唯姉は快く了承してくれて憂姉は「しょうがないなー」と言  
って手伝ってくれた。ありがとうお姉ちゃん達！

「じゃあ僕は最初の二十日分書くから唯姉はその後の十日間、憂姉  
は最後の十日分やってください！」

「おーけーだよー」

「分かったー」

唯姉はありがとうなーいつもならこんな時間に起きないのに手伝っ  
てくれて。憂姉はお弁当作るとか大変なのに。いいお姉ちゃん達に  
恵まれたな、僕は

それから何とか全てを終わらせた僕、日記の内容？聞かないでくれ  
ると嬉しいな……

「終わったー」

「もう、手伝わないからね」

「もう、こんな事はしたくないよ。とにかくありがとう憂姉」

「どういたしまして」

憂姉にお礼を言う

「唯姉はわざわざ僕のために早く起きてくれてありがとう」

「えへへーどういたしましてー」

唯姉にもお礼を言った。よし！これで準備万端！

\*\*\*

「真司君宿題を忘れるなんていけないー」

「畜生！こいつが持つてくるとは思ってもいなかった！」

などと言って学校で天狗になっていると

「ちょっと平沢君来てくれない？」

「はい？何でしょうか」

先生が呼んだので来ると日記を出された

「これ、どうして日記の中にハートマークとか書かれてるのかな？」

まさか……これって唯姉の書いたページじゃん！

「へ？これは……ですねえ……えーと」

「これまさか君のお姉さんと一緒に書いた日記じゃないのかい？」

ウッ！バレてる

「まさかーそんな訳ないじゃないですか」

「そつ……あくまで強情を張るつもりなら」

なにをする気なんだ？

「皆さん聞いて下さいーい」

そう先生が言つとクラスメイト全員がこちらを振り向く

「この平沢優君の日記にはハートマークが書かれていましたー」

え？先生はなにを言い出すんだ！

「おいおい！マジかよ優、やっぱりそういう趣味だったんだなー」

「真司め……いつか殴る！」

その真司の声で周囲がざわめく。憂姉は「自業自得だよ」っていう



目で僕を見てくる

そしてしばらく僕の嫌な噂と先生から目を付けられたのは言うまでもないよね！

## 宿題！（後書き）

はい、という事で夏休み編終わりです。次は日常編&学園祭編です！まあ学園祭編はしばらくしてからだと思いますけど

## 席替え！（前書き）

日常編のネタが思いつかなかったので更新遅れました。後今回自信がない……すみません！もう、学園祭編に入っちゃおうかな……

席替え！

「ふぁーあ眠い」

授業中大きな欠伸をしながら机で上手く寝ている僕、ホントにこの季節は眠くなるよね……………ハイそうですよ。僕はいつだって眠たいんです！そんな一人ツツコミをしていると

「それじゃあ平沢、この問題を解け」

憂姉、呼ばれてるよ

「おい、平沢！」

憂姉も寝てるのかい？眠くなるよねこの季節は

「起きろばかヤロー！！！！」

「はっ！」

耳元で大声を出された。先生がやるなんて大人げないですよ

「全くお姉さんを見てみる、真面目にやってるぞ」

憂姉は黙々とノートをとっている

「憂姉はデキるんですよ。僕と違って」

「ハア…………とにかくこの問題を解け」

「えーと、十二ですか？」

一応出してた答えを言う

「正解だ。間違ってたら居残りプリント出す所だったぞ」

そう言っただけで教壇に戻って行く。あぶねえー書いててよかった。

まあとにかく、そんな平凡な一日。唯姉が言うには最近軽音部に顧問が出来たらしい。ってかいなかったのかよ！顧問。

「そっだ、優」

「なんだよ真司」

斜め前のこれまた僕と同じ様に寝ていた（起こされたが）真司が話しかけて来た

「今日は席替えがあるらしいぞ」

「え？マジか！」

そう、今日は席替えがあるらしい。僕としては嬉しい事だ！なんと言っても窓側の席が取れるかもしれないし！後ろの席が取れるかもしれない！まあ逆の可能性もあるんだけどね

\*\*\*

つてなわけです。席替えの時間だ。まあそこらへんの男子や女子は「あの人の後ろがいいな」とか「あそこだけには行きたくない！」などハイテンションで会話している。僕はと言うと眠たいので寝てる……というわけにも行かないので一応起きてるって感じ。ちなみに席替えはクジ引きで決めるらしい。最も簡単な方法だ。

「……という訳で今からクジ引きをするのでクジを引いても私たちが開けてもいいですよというまで開けいでください」

学級委員がそんな事を言ってる。そうして男子は男子。女子は女子とクジ引きが開始された。……眠い。突っ込みどころもない。あゝ暇だゝ

「あーあ平沢さんと一緒にいいな」

などの男子陣からの声が聞こえる。憂姉ってそこまでモテたっけ？

「優、なんか言った？」

横に怖い笑顔でいる憂姉がいた。つていたのか憂姉！

「じ……冗談だよ憂姉。あれだよ、アメリカンジョーク。うん。」

「ハア……すつごく見苦しい」

「ごめんなさい」

などと謝っていると

「あの……平沢君？クジ……引いてくれない」

「あ、ゴメン、ゴメン」

と言ってクジを引く。開けちゃダメなんだよね

「平沢さんも」

「分かった」

そう言つて憂姉もクジを引く。番号何て書いてあるだろ。他の男子だったら嫌だな……ってこれはシスコンみたいじゃないか！考えるな僕！

「それでは皆さん、クジを一斉に開いてください」

その学級委員の声で一斉に全員がクジを開く。僕の番号は……よし！窓際だ！しかも後ろ！絶対に寝れる！怒られライフさらば！

「それでは机を移動してください」

超ハイテンションで机を動かす僕。横が誰なのか考えずに

「よう、優」

「また真司か」

「悪かったな。それよりもこれで俺たちは寝れるな!」

「うん!」

的な言葉を話していたのだが……

「横の席だね」

まさかこの声は……

「憂姉?」

恐る恐る顔を出しあげると。そこには憂姉の姿が

「うん、よろしくね。それと寝たら叩くから」

殺気がこもる憂姉。キヤラ壊れてるよ

「ハッハッハッ残念だったな優!お前はもう寝る事が出来ない!」

「そういう真司もね」



決してこの声は僕ではないよ！

「げ……純」

そこには憂姉の友達、鈴木純がいた

「真司、寝てたら叩くよ」

「ハイ」

ちなみに真司は純さんと幼馴染らしい。案外仲いいとか

「けど、大丈夫！まだ僕達には次の席替えがある！」

「ああ！そうだな」

とか言ってお互いに慰めていると先生からさらに僕達をどん底に落とす言葉を言った

「それと、これから席替えしないから」

「え？」「」

僕と真司の声が重なる

「これは私と学級委員が決めた事だ反論は許さん」

「反論は許さんって……先生大人げない」

ってそんな事言ってる場合じゃない。これじゃあもう僕達は授業中寝る事が出来ない！

「良かったね〜優」

「良かったね〜真司」

憂姉と純さんが言う。そんな訳でこれからは寝る事の出来ない授業と化してしまった。これからどうすりゃいいんだよ！！！！！！！！

「寝なきゃいいじゃん」

「それはそうだけでも！」

唯姉の学園祭も近い……（唯姉の事を考えて現実逃避）



席替え！（後書き）

全く文章力がない……

## 学園祭前！（前書き）

つーわけで今回学園祭前編です。

## 学園祭前！

唯姉の学園祭も近づいて来た今日この頃。いつもの様に唯姉とだらけていると

「じゃジャーン見てよゆうー」

「何それ？」

唯姉が何か書いてある紙を出して来た。あれは……歌詞カード？

「これはねー 澪ちゃんが学園祭の時用に作ってくれた歌詞カードなんだよ！」

澪さんが書いた歌詞カードか、さぞいいんでしょうね

「そこで！優にこの歌詞カードを特別に見せてあげよう！」

「ホント！」

「はい、どうぞ」

と言って歌詞カードを唯姉が僕に渡した

「えーと

キミを見てるといつもハートDOKI DOKI

何か変だな？

揺れる思いはマシュマロみたいにふわふわ

あれ？体が……

いつもがんばる キミの横顔ずっと見てても気づかないよね

何か痒いような

夢の中なら 二人の距離 縮められるのにな

あーっ！！！！！！！！だめ！痒くてしょうがない！

痒い痒い痒い痒い痒い——つ！！！！！！！！」

騒ぐ僕、何処をかいても痒くてしょうがない！メルヘンチックすぎる！澪さんってこういう趣味だったのか？

「大丈夫？ 優」

「なんとか、唯姉は大丈夫だったの？」

「何が？」

「この歌詞だよ。痒く何なかった？」

そう言って唯姉が痒くなったと言うかと思っ たその時

「全く、いい歌詞だと思ったよ！」

いい……歌詞？

「唯姉、一度精神科言った方がいいよ」

「お姉ちゃんに対して失礼だよ優！だいたいムギちゃんもさわちゃんもいい！って言ってたもん！」

「紬さんも？！ってかさわちゃんって誰？」

「さわちゃんは私達軽音部の顧問だよ！」

「顧問をさわちゃんって……先生泣いちゃうよ？」

「細かい事は律ちゃんに聞いて！私は知らない！」

律さんも相変わらずだな。ってか突っ込みポイント多！細かい所じゃないだろ……

「まあそんな事は置いといて……」

置くんかい！

「私がボーカルをする事になりました！」

「唯姉、ボーカル？！凄いじゃん！」

「えへへ」



「だけど大丈夫なの？唯姉ギターと一緒に歌を歌うの苦手じゃん！」

そこが一番心配だ。

「大丈夫！今さわちゃん先生と特訓中だから！」

「そっかそっかいや顧問がいたのか。なら大丈夫だね！応援してるよ唯姉！」

「ありがとう優！頑張るよ！」

とか言ってたのに……

\*\*\*

「いやゝ練習しすぎて声枯れちゃった！」

「ダメじゃん！」

「テヘッ！」

「テヘッ！じゃないよ！」

どうなるんだ？桜校軽音部初めてのライブは……心配だなぁ

## 学園祭前！（後書き）

今回学園祭前！という事で唯メインの話になりました。次回はちゃんと憂も出ますんで！では！

## 学園祭！1（前書き）

ついにやって来ました学園祭編！オリジナル部分がありますので

## 学園祭！1

只今、七時三十分

憂姉におこされ、いつもはいるが今日は学園祭の下準備でいない唯姉を思い出しながらテレビを見てた

『ご覧くださいこの紅葉！秋が感じられますねえー』

など言う男性アナウンサーの言葉を耳から耳へ流しつつ、座りながら二度寝をしようとしていると憂姉がテレビを消した

「あ……」

「ほら、優そろそろ行く時間だよ？」

「ああそうだね」

と言いながらも二度寝にまた入ろうとすると……

ゴンッ

「痛っ！」

力強い憂姉の拳が僕の頭にダイレクトに当たった

「ほら優、二度寝はダメ」

「はい」

そんな事を言いながら重い腰を上げる。さつきも言っただけ今日は学園祭だ。唯姉達桜校軽音部の初ライブでもある。従って今日は土曜日、何時もなら寝ている時間なのでごく眠たい。

「ほら、早く行かないと遅れちゃうよ?」

「待つて憂姉!今行くから!」

そう言いながら憂姉を追いかけて玄関まで向かう。しかし唯姉、僕や憂姉より早く起きた事、凄い尊敬します、快拳だと思っよ!

唯姉が起きた後、憂姉が起きたのだけど『学園祭の下準備でもう行ってるよ!ライブ見に来てね!』と置き手紙を残して先に

行ってしまった。普通の唯姉ならあり得ない事なのだが、事実!それは起きた!これからはその事件を『唯姉事件』と名付けて

心にしまおう!そう思いながらまたもや夢の世界へ入ろうとする僕

「ほら、優!」

「ちょっ!ホントに待つて!」

そう言って歩き出した憂姉を追って僕も走り出した

\*\*\*

「ハアハアハア」

「何？優、荷物運びでそんなに疲れたの？」

「そりゃ……疲れ……るよ」

僕は桜校まで荷物運びをしようと提案したのだが

「ボロ負けだもんね」

そう、全敗してしまった。何度やっても結果は何故か負けばかり。そのせいで、ずっと荷物を持つてるハメになってしまった。これはアレだ

「不幸だ……」

某上条さんの真似をしてみる。こりゃ上条さん顔負けの不幸さじゃない？

「ほら、荷物持ってあげるから」

「ありがとう」

って、自分の荷物持ってるだけじゃん！少しでも期待しちゃった自分が恥ずかしい

「じゃあこれからは自由行動ね！ライブの時間になったら体育館前集合だよ」

「了解」

そう言って憂姉と別れてパンフレットを受け取ると唯姉のクラスでは焼きそば屋さん、と書いてあった。お化け屋敷やりたい！って言うってたけど唯姉反対されたか……。

「まず、そこに行くか」

そう言って、長い長い唯姉最初の学園祭が始まったのだった





## 学園祭！1（後書き）

感想、アドバイスは制限なしにしたのでどんどんください！

## 学園祭！2（前書き）

はい、今回は学園祭二回目です！優のキャラがおかしくなって来た様な気がするのは僕だけなのだろうか。

## 学園祭！2

「しっかし広いな」

桜校本校舎は私立というだけ大きかった。そう言えば僕って来年この高校に通うんだよな？まだ女子高だけだけど心配だ。何が起きるか分からない。多分唯姉がいる限り。途中でメイド喫茶と書いてある看板に誘われたが、僕も男だ！それくらいの覚悟は……

「いらつしゃいませ」

全く出来てないです！いや、誰だって男なら思うでしょ！「出会い」が欲しい、と。このメイド喫茶に入ったら、それがきっかけで交際が始まって終いには……ヘッヘッヘッなんていう変態的な言葉を言うのはここまでにしよう。進展が全くない

「えーと、ここに書いてあるケーキを一つ」

「かしこまりました」

店員を呼んで僕が一番好きな甘いケーキ「ショートケーキ」を頼んだ、え？チョコレートケーキとかモンブランとかの方が美味しい？人生をもう一度見直した方がいい。ショートケーキの凄さに感動する事だろう

まあそんな事を言って一人で脳内トークをしている可哀想な僕。暫くするとショートケーキが運ばれて来た

「あ、紬さん」

「あ、優君じゃない？何でここに？」

ケーキを運んでいたのは紬さんだった。メイド服付きで。全く、メイド服なんて何処で買ったんだか、けしからんな。というのはいくくの前談でメイド服万歳！唯姉が着たら似合うんだろーな。なんて軽いシスコン発言をしつつ（決してシスコンではないよ！）ケーキを口に運ぶ

「あ、美味しいです。紬さん」

「そう？良かったー私の家から持って来たからあまり自信がなかったの」

ケーキを学校に持って来るってどんな家だ！あつ！そっか！紬さんは軽音部にティータイムを作った主犯だからかゝってそれでもダメでしょ！普通学校にケーキは持って来れない！持って来ていい学校があつたら連絡してくれ、速攻で転校するよ！

「ありがとうございます」

そんな影ツツコミをして、ケーキを食べ終わった後、紬さんに見送られつつ、今度こそ一年三組、つまり唯姉の教室に向かおう、と心に決めた

\*\*\*

僕が唯姉と会うために一年三組の教室に向かっていると

「あ、澪さん」

五mぐらい先に澪さんがいた

「あ、優どうしたんだ？」

「唯姉を探しに行ってたんです。ところで、澪さんは？」

「軽音部室に行ったんだけど誰もいなくて……」

そう言つて澪さんは顔を暗くした。唯姉！どうして軽音部室に行つて練習しない！澪さんというビューティフルガールが泣いてはいないけど、精神的に泣いてると思う人をほったらかしにして！懲役五年は確実だよ！もちろん僕の法律だけど

「まあ、文化祭ですし、仕事でもしてるんじゃないですか？」

「そうかもしれないけど……」

「まあとにかく唯姉に会いに行きましょうよ、何か事情があるかも知れませんか？」

「そうだな」

そう言つて澪さんと一緒に文化祭に来てる男子共の視線を感じないのは、多分この自分が女子に見えるからであろう。自分で言つてて情けない……

「はい、いらつしゃい、いらつしゃい安いよ安いよ」

そんな事を考えると唯姉の声がした。あ！ここ、一年三組なんだね！

「はい、一人前ね、ありがと」

とか何とか言つて焼きそばを私ていた。何だろう、唯姉が真面目に仕事しているこの風景って

「ちよつと唯！」

澪さんが唯姉に駆け寄る

「あ！澪ちゃん！そして優！どうしたの？焼きそば買いに？ちよつと待つてね」

唯姉、違つだろ……

「何でそうなる？そうじゃなくて今日は本番だろ？めいっばい練習しておこつよ」

「ごめんね、わたしも練習したいんだけど、朝一はクラスの当番になっちゃって」

そしてダミ声、と思つた途端

ブーン

「あ！ブレーカーが落ちた」

「え！また今日何度目よ」

「ちょっと！ホットプレートは三台だけよ！」

「私達のクラスじゃないわよ！五組じゃないの？」

そしてグタグタである

「みんな大変そうだな。私、律のクラスも見ってくる」

と言って去って行つた。

「優はどうするの？」

あ、そうだ！僕はどうすればいいんだ？

「優も手伝つてよ」

「それはダメです！」

「えー」



えーじゃないよ唯姉！僕は部外者です！

「あ！和ちゃん！」

と、突然帽子被った和さん登場

「大丈夫なの？その声」

全くである

「大丈夫だよ！部活で練習しすぎちゃっただけだから」

「今日が初ステージでしょ？三時からだったっけ？」

「うん！」

「じゃあまだ時間あるし練習しておきたいんじゃないの？」

全くだ！零さんが困る

「え？でも」

「じゃあもう行っていいわよ？後は違う人に頼んでおくから」

「でも迷惑が」

「いいから、いいから」

「僕も練習した方がいいと思うよ？」

澪さんが困ってるしね！

「でも、でも」

「行つて来なよ、唯」

「ここは任せて」

唯姉の友達も行つていいよと言う。いい友達を持ったな。唯姉

「うん！ありがとう！」

案外簡単に納得してすぐさまギータを背負つてダッシュして何処かへ行つてしまった唯姉。それを僕と和さんが見届ける

「で？優はどうするの？」

「え？僕ですか？」

確かに唯姉が部室に行った今、何処へ行けばいいのか分からない

「そうだ！唯がいなくなつたし手伝つてくれない？」

「和さん、それはちょっと……」

ダメです！学校の先生に代わりにこのテストの集計、やっといてくれ！と同じくらい、いやです！

「冗談よ冗談」

「怖い冗談ですね」

冗談が冗談に聞こえないのが和さんだと思う。しかし……

「いないわね、代わりにやってくれる人」

和さんが困った様な顔でいう、これは……

「誰かやってくれないかしら」

と言ってこちらに目をやって来る。やってくれと言いたいんですね、分かります

「分かりましたよ……やります」

「やってくれるの？ありがと。じゃあお願いね」

「はあー」

ため息が出てしまう僕。これは不幸フラグなのか？某上条さんみたいになってしまったのか？じゃあ恋愛フラグもたつのかな？

「バカな事は考えない方がいいと思うわよ？」

流石、心を読む和さんだな、全てが分かっってしまう

「はあー」

もう一度深いため息をついて嫌々ながらもブレーカーがよく落ちる

ホットプレートを優しく使って、次の交代を待った僕でした。

## 学園祭！2（後書き）

ふいー終わった。ちなみにムギちゃんを出すタイミングが見つからなかったのてこういう事になってしまいました……。おっと！律ちゃんはお出るんで大丈夫だよ！ホントだよ！（汗）

## 学園祭！3（前書き）

更新遅れてすみません！

### 学園祭！3

中学生なのに高校生の文化祭の手伝いが終わり……ってなんで僕は高校生の手伝いをしないといけないんだ！って今頃思ったってダメだ……はあ

なんて思っているやっとなんて自転車に乗れた小学生みたいな感じでふらふら歩いてる唯姉を見つけた

「おい唯姉！」

「あっ！ゆうー」

と言って抱きついて来た

「ちょっ！抱きついてこないで！」

「嫌だー」

「だめ！ちょっ！視線が」

男達のしせんが————！！！！！！！！

「うーしょうがないなー」

と言って別れてくれた。見知らぬ男子に殺される所だった。危ねえー

「所でなにやってるの？唯姉」

「見ての通り！重い重いアンプを運んでいるのです！」

「重そうに見えない……って重！こんなの普通に運べる奴……」

その時、紬さんが同じ様なアンプを口笛を吹きながら

「汗一つかかずに……！」

僕と唯姉がハモる紬さんはシャランラシャランラと言いながら二つ目のアンプを運んで行った

何あれ？サイヤ人？エヴァ？超能力？とにかく何なんだ！あれは！

「さあ紬さんを見習って唯姉もスタートだよ！」

「へ？う……うん！」

紬さんを見てからぼーっとしていた唯姉を起こしてアンプを持って歩かせようとするが……

「あーもう動けないよーゆうーやってー」

やめて！その上目遣い！僕はもうその目には……

「僕がやるよ……」

勝てない……

「ホント？ありがとう」



と言って重たいアンプを持たされて唯姉と同じ様な動きをしながら  
体育館裏まで歩いた

僕は……パシリなのか？パシリなのか？

\*\*\*

「あつ！和ちゃん！」

体育館裏には和さんがいた

「唯と優じゃない。今、演劇部が始まったから端に置いて……  
って優が運んでるじゃない！」

いや、それ和さんも人の事、言えませんか！

「優が手伝ってくれたの！」

「ああ、手伝ったのね」

納得しないでください和さん。そう言っただけで和さんは生徒会の仕事に戻った。今は……知らない人にこの後のスケジュールを教える。多分生徒会長か？この生徒会長が後に軽音部にちょっとした事件をもたらすのだから、これはまた別の話

「優！」

「何？唯姉」

「これから演奏だよ！絶対見に来てね！」

「うん。分かってるよ」

「じゃあ、今度はステージで会おうね！」

そう言っただけで何処かへ行ってしまった。多分部室にもどったんだと思う、何か……

「寂しいな」

そうつぶやき、体育館裏を後にした

\*\*\*

体育館前

「おーい憂姉！」

「あ！優！遅いよーもう」

「ゴメンゴメン、いろいろと遅くなっちゃって」

また別のメイド喫茶に行つてたとは死んでも言えまい

「そろそろ始まっちゃうよ！早く行こ」

「うん」

そう言つて憂姉に手を引つ張られ体育館に入った

「私の出番なくね？」

「ゴメンなさい律様！出すタイミングが見つかりませんでした！」

「もっと活躍したいのに……全く」

「ホントすみませんでした！」

「

### 学園祭！3（後書き）

はい、最後の通り律ちゃんを出せず、すみませんでした。律ちゃん結構好きなキャラなんですけど……すみませんと忘れです。これからはちゃんと忘れしない様気をつけます。

## 学園祭！4（前書き）

今回は漫画の方が入ってる要素が濃いです。そして優がついに男をすてます



や！！！

「憂姉！黄色のピン持ってない？唯姉が使っあのピン！」

「え？持つてるけど……まさかあれを使うの？けどあれは優がもう使いたくないって……」

「僕は僕の心と戦って勝った！！演奏妨害しないためにはそうするしかないんだ！」

皆さん思いの事でしょう「変態か？」と、だが今の僕にはそんな事は考えてはいけない！僕自身こんな事をやるのは嫌だけど演奏妨害して睨まれる方が嫌だ！

「わ……分かった」

そう言って憂姉は二つのピンを渡す。よし！髪の長さOK！ピンスタンバイOK！行くぜ！！！！

「俺がそんなふざけた幻想をもつならば……俺は俺の幻想をぶち殺す！！！！」

何処かのフラグたて野郎の真似をしてピンを二つ髪につけたすると

……

「憂お姉ちゃん！！！！」

ヤバイ！これじゃあ！自我が持てない！

「ちょっと優！いきなり……」



「憂姉……僕の最後の言葉だ……演奏が止まったらこのピンを外してく……」

最後に自分の自我を振り絞って勇者の最後の言葉みたいな感じで言い放ち僕の心はついに自我が保てなくなった

ちなみに僕は二つの黄色いピンをつけると唯姉と同じ性格になってしまい、自我が保てなくなるというふざけた体質の持ち主。なんでこの体質は憂姉にはないんだ！と言ってもなってしまったものは、しょうがない。はあゝ

「憂お姉ちゃんあつたかい」

「えへへ、私もだよ優」

ちょっと待て！なんで憂姉は止めないんだ！（心だけは残ってる）

「さっ！そろそろ演奏の始まりだから離れよーね」

「はい」

なんて純粋な僕なんだ……しかも周りの目を気にしないで……すごいぞ僕！

間もなくして会場が暗くなり桜ヶ丘高校の軽音部登場！……ってなんでみんな制服じゃないんだ？

「唯お姉ちゃんかっこいいね」

「そうだね！皆かつこいい」

「おーい唯お姉ちゃん！！！」

「あ！ゆうー！！！！！！」

そう言っただけで僕達の存在に気づいた唯姉は手を振る……な……なんて優しい姉なんだ！

秋山さんはボーカルと聞いたなのに震えて動いていない。その時唯姉が

「澪ちゃん！私澪ちゃんが頑張っただけ練習してたの知ってるから！絶対大丈夫だよ！頑張ろう！」

唯姉の声がマイクを通して聴こえる。ダミ声だがその言葉で気合が入った澪さん。ドラムの律さんを見る、そして……

「1！2！3！4！」

「君を見ているといつもハートドキドキ」

\*\*\*

演奏が終わった。全く痒くはなかったので成果はあったようだ。拍手が送られる

「おい唯お姉ちゃん！かつこよかったよー！！」

「ありがとうゆうー！！！！！！」

だがこのままでは……このままではまずい！自分の本拠地が敵にバシるよりまずい！

「唯お姉ちゃん！！！！大好きk」

すかさず憂姉がピンを取ってくれたおかげで禁句を言いそうになった僕は自我を取り戻した

「ふう……ありがとう憂姉」

「危なかったね。シスコン呼ばわりされるところだったよ？」

「命の恩人だ……ありがとうございます」

神のように憂姉を捧める僕。

「みんなーっ！ありがとー！！！！」

澪さんがそんな事を言つと、客席からキャーキャーとか何とか言われている。

だが帰ろうとした瞬間、澪さんがすっ転び……

「優！見ちゃダメ！」

「え？何？何なの？何があつたの？え？」

「気にしないで！さあ帰ろう優」

「ちょっと待つて。力がつよ……うわあああ！！！！！！」

引きずられて帰らざるを得なくなった僕。出て行つた数秒後にキャアアアという澪さんの声が聞こえたのはきつと気のせいだ。そう、気のせいに違いない。うん！その通り！！！！

しかし何だつたのだろう。あの悲鳴の意味は。帰る途中何度も憂姉に聞いたが。顔を赤くするだけで答えてくれなかった。

#### 学園祭！4（後書き）

次回は平沢家でなんかしますオリジナルストーリーで！多分……唯の……何でしょうか？ほら、十一月といえばほら、あれですよ。ねえ、では次もよろしくお願いします！

**HAPPY BIRTHDAY唯姉！1（前書き）**

誕生日編です！

## HAPPY BIRTHDAY唯姉！1

さあ今日は何を隠そう唯姉の誕生日プレゼントをかう日だぜ！かう日なのだが……

「唯姉にプレゼントする品が決められない……」

そう、僕は優柔不断な性格なのでなかなか選べないのだ。ってな訳で

「お姉ちゃんのプレゼントを選ぶぐらい自分でやってよね？」

憂姉についてきてもらってます。去年も一昨年もその前もプレゼントが決まらなくて唯姉が喜ぶ事をしなきゃいけないようになったんだよ！僕だって女装に耐性がなくなるのは嫌だ！だからこそ今年こそは唯姉にちゃんとしたものをプレゼントしたい！

「はい」

てきとうに頷きながら憂姉に唯姉の誕生日プレゼントを僕の方まで買ってくれたらなーなどという野望？を抱きつつ、憂姉と共に歩く僕

「どんな物がいいと思う？唯姉の誕生日プレゼント？」

「うーん、お姉ちゃんは可愛い物なら何でもいいからなー。でも一番はお姉ちゃんに喜ばれる物をプレゼントするのが誕生日プレゼントじゃない？」

唯姉に喜ばれる物が……

「憂姉は何を買ったの？」

「秘密だよ」

「教えてよ憂姉」

「はい、はい。お姉ちゃんの誕生日にねー」

「意地悪だな憂姉は」

そういいながらも唯姉の誕生日の楽しみが増えたと思いつつ、何かいいものはないかなーと周りを観察する

「秋フェアが多いね」

「確かにね」

唯姉の誕生日は十一月二十七日、その一週間前にここに来ているので秋真っ盛りなのだ！

「秋ね」

秋といったら焼き芋！屋台で売ってる焼き芋はもはや神だ！美味すぎる！一回食べて見たらどうだ？あ！でも屋台によって味が違うからな。って話がそれてるぞ僕！

「秋と言ったら何だと思う憂姉？」

「秋？うーん、何かなー、紅葉かな？」



「紅葉？」

「うん、木の色とか葉っぱの色とかが秋に大きく変わるからなんか印象深く残ってて」

「成る程……」

やっぱり憂姉の言う事には納得できる理由が入ってるよな。しかし紅葉か……

「よし！僕は決めたよ！」

「何が？」

いきなり大声を出した僕にすかさず突っ込む憂姉。さすがにだね憂姉！

「今年の誕生日プレゼントをだよ！」

「ホント！良かったじゃん！何々？」

「秘密でございますよ」

憂姉も言わなかったのに何で僕が言わなければならん！

「えー気になるなー」

憂姉ならこう言うけどもし唯姉なら「えー優の意地悪ー」とか言っ  
て僕は「意地悪って理不尽な！」って言ってただろうな。なんて  
いう事をのんきに考えながら

「よし！後はケーキを買っただけだね」

「え？材料は？」

「また明日買っよ」

「いいの？」

「うん。これはサプライズパーティーだからね。憂姉にも隠しておかないと」

いつも僕達の誕生日はサプライズパーティーなのだが、いつもつつい  
つ誕生日という事を忘れてしまい、サプライズパーティーに驚か  
されてしまう。なんか変だけど、忘れてるなら忘れてるでいいんじ  
やないと思う。だってそれこそ誕生日だと思えるから

「じゃあケーキを買おうよ優！」

「うん、行こう！」

そう言ってケーキ屋さんへ行った

\*\*\*

## 符二家

かの有名なケーキ屋さんでいつもマスコットキャラクターパコちゃんの人形が同じ立ち位置に立っている。当然の如くケーキ以外にも売ってる。僕達はここでケーキを買うつもりだ。

「どれにしようか、優」

「うーん、僕としてはショート」それは優が好きなケーキでしょ？」  
「えー」

意見を言う前に僕の意見は拒否された。まあ唯姉の誕生日だし、しようがないか。

「唯姉ってどんなケーキが好きなんだっけ？」

「うーん、チョコレートケーキかな？」

チョコレートケーキ……やっぱショートケーキだろ。唯姉は間違っている！だけど誕生日だからなー

「しかしチョコレートケーキと言っても……」

「あんまりいいのがないね」

ホントにこれ！と言ったケーキが見つからない。天下の符二家が何をやってるんだ！何でもケーキなら売ってんだろ！などという理不尽な意見を勝手に思う僕

「はぁーないならしょうがない。ショートケーキにするか」

などと憂姉が言ってる時に一つのケーキが僕の目に入った

「どうしたの優？」

「あのケーキ……」

ショートケーキでもチョコレートケーキでもないけど誕生日ケーキには相応しいケーキがそこにあった

「うわーすごいね」

憂姉も僕の方を見て感嘆する

「あのケーキならいいんじゃない？少々高いけどこれなら損はないね」

感嘆に続いて僕が無意識に望んでいた一つの答えが帰ってきた

すぐさまダッシュして店員さんに「これをください！」と超ハイテンションで言った。店員さんはビビってたけど別にいい！

その後、ケーキを僕が持って家に帰る。唯姉は部活から帰っていないはずだ

「ところで、優の誕生日プレゼントって何？」

帰り道、突然質問してきた憂姉に即答した

「秘密だよ」

「えー」

憂姉は僕の答えに納得出来なかったみたいだ。なら……

「憂姉の誕生日プレゼントって何？」

そういうと憂姉も

「秘密だよ」

と言った。交渉決裂だな。と思いつつ、来週の誕生日パーティーに期待を膨らませつつ思った。

家帰ったら作るか。誕生日プレゼントってね



**H A P P Y   B I R T H D A Y 唯姉！1（後書き）**

次は唯の誕生日パーティーです！

## HAPPY BIRTHDAY唯姉！2（前書き）

今回は短いです。今回、文章力が……ない。



## HAPPY BIRTHDAY唯姉！2

今日は十一月二十七日。そう、運命の唯姉誕生日！

さあ僕！準備は出来たぞ！誕生日プレゼントの用意は出来た！今日は母さん達も帰ってくるし。遅くなるって言うてたけど、来るだけいいさ

つてな訳で唯姉が帰って来るまでに誕生日パーティーの準備中の僕。憂姉は食べ物の準備中。僕は色々と雑用をしてる。別に料理が出来ないって訳じゃないから！ってツンデレか？僕は

「そつち用意出来たー」

「大丈夫だよー」

憂姉の心配事をこれ以上増やさないように的確な返事を出して答える。いや、憂姉の楽しんでる所を邪魔したくないって事だな

そんな事を思いながらテーブルを台拭きで拭く次の仕事に移る

しばらくして憂姉が鍋を持ってテーブルに来た。平沢家の誕生日は皆冬なので心があつたまる鍋にしている。他のもあるとかいうけど、平沢家の伝統みたいなもんだからな

「優、箸持って来て」

「OKだよ」

箸を三人分用意しようとする

「優、今日はお父さん達が帰ってくるでしょ？だから五人分」

「あっ！そうだった」

さっき思った事をすぐ忘れてしまった。これじゃ唯姉みたいな天然な男の子じゃないか！気をつけないとな

けど知らない所で神は言っていた「お前は唯と同じだ」って

まあそんな事を神が言ってるとも知らない気楽な僕は色々とその後も雑用を任せ色々やってた瞬間

「ただいま」

唯姉の声がした。帰って来たみたいだ。

「いくよ、優」

「うん」

僕達はクラッカーを持って影に隠れるそして……

「「おめでとー！！！！！！」」

パン！パン！

大きな音でクラッカーがなる。唯姉は

「え？え？」

とか言つて戸惑つてた。やっぱり忘れていたみたいだ。僕も人の事言えないけど

「お姉ちゃん忘れたの？今日は誕生日だよ？」

その憂姉の声ではっ！とする。どうやら思いだしたみたいだ

「優、憂……」

そう言つて涙目になる唯姉、僕の頭に危険信号が鳴り始める。何の危険信号だろう？と疑問に思つてると

「ありがとー！！！！！！」

今度は飛びつきりの笑顔でラリア……いや、抱きついて来た。これで抱きついて来た手が僕の顔面に当たり

「痛っ！」

これが結構強烈だった。痛い……

「大丈夫？ゴメンね」

と言つて唯姉が僕の顔を覗き込んで来た。近いです、唯姉

「いやいや、大丈夫だよ」

ホントなら、近いから離れてくれ！唯姉何で言いそうだが、今日の

僕は違う！何しろ唯姉の誕生日だからね

「ホント？じゃあ良かった」

そう言つて顔から離れて行く唯姉。ちょっとドキツとしたのは秘密で！

「じゃあ改めまして……」「誕生日おめでとー！！！！！！」

「えへへ……ありがとう」

何だかいつも以上に照れてる唯姉。さあここからが本番だぜ！

今日の目標

唯姉の願いなら出来る限り聞く

唯姉に悲しい顔をさせない

とにかく頑張る

プレゼントを渡す

女装しろって言われてもあからさまにいやな顔をしない

出来るだけ頑張るぜ！



# HAPPY BIRTHDAY唯姉！2（後書き）

次で誕生日編は最後です。

# HAPPY BIRTHDAY唯姉！3（前書き）

更新遅れてすいません！

## HAPPY BIRTHDAY唯姉！3

「今日は豪勢だねー憂」

「えへへーお姉ちゃんのために張りきりました！」

テーブルに現れる料理は一流シェフが作ったんじゃないの？と思われる程の美味しさを誇った料理がズラリと並ぶ

「ホント今日はいつになく豪勢だよねー」

「ありがとう優」

テレる憂姉は新鮮だ。僕は結構この憂姉のテレが好き。もちろん唯姉もだけど

「そっぴゃー優、お願いがあるんだけど」

「何唯姉？」

嫌な予感がする……

「ジャーン！これみて！」

出されたのは桜ヶ丘高校の制服だった

……着るんですね、わかります

分かりたくないけども……！！



「えへへ〜これを優に着てもらいたんだけど、ダメ？」

ホントは即答で嫌だ！と答えるのだが、今日は唯姉の誕生日だしその上目遣いなので僕は……僕は……

「了解です」

「ありがとう優ー」

その笑顔だけで僕は何度も涙を流せる……

5分後何か足がスースーするスカートをはいて唯姉の所に戻る

「似合う！似合いすぎるよ優！」

「すごい！お姉ちゃんそのものだ！」

そりゃあ泣きなくなる言葉をどうも

「はい、最後はこれだよ」

……ヘアピン？

「唯姉こ……これは」

「へ？私のヘアピンだけど……」

禁断の道具きました！

「流石にこれは……ね、唯姉」

そう言った時憂姉から

「今日はお姉ちゃんの誕生日だよ」

と、言われた

「そっかやっぱダメだよな。優は男だ「イイよ」ほんと！」

そう言った後へアピンを渡された。下手すりゃ僕にとっての殺人兵器と化すこの道具

「優、ほら、これをつけたら私と同じだよ！」

私と同じだよ「平沢唯」女「男を捨てる

ダメな方程式になってんじゃねえか！

へアピンは最早俺を女子にする道具だな。そういう道具はドラマの道具だけで十分だ！

ええーいままよ！

へアピン装着！

「唯お姉ちゃん！」

「わっ！優」

突然抱きつく僕。我ながら大胆な行動だ。ある意味感心するよ

「えへへ唯お姉ちゃんにだきつくと気持ちいい」

「こっちもだよ優」

ちょっと待て！羞恥心というものはないのか！ぼくには感触が伝わってきちゃうんだよ！胸が……胸がー！！！！！！

俺のHPは残り少ない！

「優だけずるーい！私もー！」

そう言っただけ抱きついてきた憂姉。三人で抱きつく。いや、もう何か……同でも良くなつて来ちゃったなー

そう言っただけワイワイ抱きついているとき、新たなる刺客に僕は気づけない……いや、忘れていた！

「……何やってるの？」

「……母さん、父さん」

何かもうすんげー気まずかった。僕と唯姉は余り動じてなかったけれども……



# HAPPY BIRTHDAY唯姉！3（後書き）

次で本当に最後！……になる筈です

## HAPPY BIRTHDAY唯姉！4（前書き）

更新遅れてすいません！

他の小説に夢中になって、この小説の次話が投稿できませんでした。  
ホントすいません！どうか見捨てないです下さい！

## HAPPY BIRTHDAY唯姉！4

「なるほど……」

いやいや、成る程じゃないよそこにいる親！

「ならいいんじゃない？」

いやいや。よくねーよ！止めてくれ！

と、言う訳でお久しぶりです。平沢優です！

只今もう一人のボクに人格を乗っ取られています。けっして千年パズルとかそう言う類ではないけども！

このままじゃずっともう一人のボクのターンじゃないか！ずっと俺のターンなのは遊戯さんだけで充分だから！

「えへへ唯お姉ちゃん」

冗談はここまでにしといていい加減直さないとまずい。しかも唯姉のあれが当たっているので、僕の意識は朦朧としている。やばいかもしれない……というかヤバい！！

とんだ誕生日パーティーになっちゃったよ……（僕だけ）

だが救世主は忘れた頃にやってくる

「お姉ちゃん。そろそろヘアピンはずしてあげたら？」

そう、僕の姉！我らが平沢憂です！

「そうだね。これ以上抱きついてると困っちゃうもんね」

おおー唯姉分かってくれたか。これでもう一人のボクを出さずに済む。良かった、良かった

憂姉がヘアピンを外す。その瞬間、僕は解放感的なものを味って

「ふう〜」

復活！バッドエンドじゃなくて良かった。バッドエンドはゲームだけで充分だ！

「ありがとう。憂姉」

「大丈夫だよ。私も優に抱きつかれたかったけど」

「……」

もう抱きつきたくない……

\*\*\*



てな訳で、その後も親達もまぜ、騒いでいると時間は速く過ぎて行くものだ。最後の誕生日プレゼントに移る

「じゃあまず、私達からね」

と言って出したのは……

「自由の女神？」

アメリカの何処にあるか忘れたけど、通常より小さい自由の女神……あれ？顔が……

「顔が違くない？」

唯姉が言つと母さんが

「いい所に気づいたわね唯！そう、この顔は……唯の顔になってるのよ！」

「え？」

もう一度確認してみると確かに顔と髪が唯姉だった

「私達で作ったのよ」

「アメリカで、二人でね」

「アハハハ」

「ウフフフ」

おお……あちらにピンクのムードが！

「じゃ……じゃあ次は憂姉のプレゼントで」

「うん！これだよ！」

そう言って見せたのが……

「服か」

僕からみればセンスのいいピンクのセーターだった。多分見た限り自分で作ったんだろうな流石憂姉

「ありがとう憂々早速明日から使うね」

「えへへ〜ありがとうお姉ちゃん」

デレる憂姉。次は……

「じゃあ次は僕だね」

で、見せたのが……

「あ！私のギター」

見せたのは唯姉の重いギター

「どうしてお姉ちゃんのギターが？」

「唯姉のギター汚かったからさ。ギター店まで行ってメンテのやり方教えてもらって自分からやったんだ」

「新品みたいだ……ありがとう優！」

「えへへ、ありがとう」

思わずデレてしまった！

「ホント綺麗になってるわね」

「うん。ホントに」

「ありがとう父さん達」

何時の間に、ピンクのムードはなくなってた。あのムードがあるやりづらい。

「では……四人で合わせて……」

「「「「誕生日おめでとう！唯……！」「」「」

「みんなありがとう！……！！！」

因みに父さん達は翌日、中国に行きました

## HAPPY BIRTHDAY唯姉！4（後書き）

実は最初の優のプレゼントは歌だったんですけど、歌詞なんちゃらで別のプレゼントに。納得出来なくても納得していただけると嬉しいです

憂姉が家庭教師！

「オラは怒ったぞーフリーザー！！！！」

とか言ってる何処ぞの戦闘民族がいる再放送のテレビを見ながらおせんべいを食べていると、ある一人の少女が目に入った

そう、憂姉だ。リビングで静かに勉強をしている

状況説明が遅れたね！ただいま唯姉の誕生日が過ぎて一週間、やつと荷が降りたと思いつつゆったりとしていた。因みに唯姉は部活中、因みに僕は立派な帰宅部所属だ。そう、立派な

「何やってるの？憂姉」

「え？何やってるのって……これだけど」

ベネ セの通信教材だった。あれ？何故にこんな物を？

「忘れてないと思うけど明後日」

「明後日？」

何だろっ嫌な予感しかしないぞー！

「期末テストだよ」

キマッテスト？

「そしてこれ」

憂姉、僕をまたどん底に落とすつもりなのか・・・！！

「桜々丘高校の過去問」

カコモン？

「優？分かっていると思うけど再来月は……」

入試だよ？」

「あ……」

「優、まさか忘れ「勉強するぞ」！！」……優」

目にも留まらぬ速さで階段を駆け上り自分の部屋へ

ヤバイヤバイヤバイ！！！！！！

再来月は入試で明後日は期末テストだって……………！！！！！！

上条さん……！この幻想をぶっ殺しちゃってください！

いや！これは幻想ではなく現実！ぶっ殺す事は出来ないんだ！クソ！

こうなったら……

何しょ？

\*\*\*

てな訳で……

「憂姉～お願いします！勉強教えてください！」

困ったときの～憂姉！

「ダメ！こういうのは自分の力でやるものだよ。優！」

手厳しい……

「だって……だってだよ！最早憂姉に頼るしかないし！」

「それでも！優、やり方だけ学んで理屈を学ばないじゃん！」



「そこをなんとか！憂姉様！」

「ダメったらダメ！」

今回の憂姉は手強いぞ、きっと難易度最高のラスボス以上に手強い！メラゾーマじゃびくともしない！復活の呪文を何度唱えれば……って話が逸れてる！

「お願いします！憂姉！もう頼れるのは貴方様しかないんだ！どうかこの無能な僕を救ってやってください！」

「ダメ」

「きっと憂姉に勉強を教えてもらったら界王様の修行より学力がぐくと思っから！」

「あれは武道でしょ！」

「じゃあ元気玉が……」「それも違う！」……ハイ」

怖えええー……戦闘力がどんどん上がっている……バカな！

「ホントにお願いします。僕憂姉がいないと勉強が……」

ここまで言うと流石に憂姉も折れてくる

「分かったよ、弟のためだし。仕方ないか」

「ありがとっございますー！」

こうして僕は憂姉の弟子になった！

\*\*\*

「じゃあこの問題から……」

憂姉の部屋で勉強する事になり部屋へ向かい座る

ここで大事件発生！

集中出来ない！

理由はですね……

何故か憂姉から良い匂いがするのだ！いや、この匂いで俺の神経は壊れ始めている

何故だろう？いつもこんな事意識してないのに……やっぱり女の子の部屋にいるからか？とにかく大変な事になってしまったのだ、このままだとテストで良い点が取れず挙げ句の果てには中学浪人……はっ！ダメだ！どんな考えが後向きになっていく！

「優、聞いているの？」

突然憂姉が心配なのかなんなのか、聞いて来た

「いや、ちゃんと聞いてたり聞いてなかったり！」

ヤバ！テンパっちゃった

「と、言う事は聞いてなかったという事が？優？」

「ハイ、ナンデショウカ、ウイネエサマ」

我ながらロボットみたいな喋り方だな

「もう、分かった、分かったよ、優」

「何が？」

「私が入試まできちんと勉強を教える！」

「え？！」

教えたくないんじゃないの？！

「優を見てるとこっちが心配になってくる。そこ！手を止まらせない！」

「はい！」

こうして憂姉が家庭教師をする事に決まった

その幻想をぶち壊したい！

期末テスト！

今の心情はこうだ

ラスボスと、交戦中の勇者様！

ラスボス〓試験用紙で、勇者様〓僕だ

これでお分かりだろうか？

そう、現在期末テストと一対一の真剣勝負中だ。今のところ、憂姉のスパルタ特訓により僕の方が有利ってとこだな

とこなはずだ……

うん、きっとそうだ……

きつとね……

んなワケねーだろーが！

いやね、確かにね、憂姉のおかげで勉強は普段よりいい方ですよ！  
うん！しかしね、それとテストというのは無関係でありまして、た  
ったの約3日間で、期末テストでいい点がとれるなんて富士山がエ  
ベレストより大きくなる事以上にあり得ないんだよ！

3日間という間に成し遂げられる事は……強くてニューゲームをし  
た勇者が魔王を倒すぐらいだけだぞ！

なんて事を考えている僕にはそんな事を考える余裕もないのだが、  
こうでもしないとテストに集中出来ないんだよ！

……ハイ、こんな事考えてもテストに集中出来ません。調子乗りま  
した

今の状況は期末テスト最終日だ。最初は「僕は平沢優ではない！テ

ストを倒す者だ！」的なハイテンションだったのだが現在は「あー補習どうしょー」みたいな感じになっております

そんな事を思いつつ、書く事を進めては止めて止めて進めては止めて止めて進めては……

キンコーンカーンコーン

そんな楽しくない時間もいつかは終わりを告げる。このチャイムは僕達を救ってくれるチャイムだ

「それではーテスト用紙を集めるぞー」

先生の声で後ろにいる人が前の人にテスト用紙を回す。自分も前に回した

「テストどうだった？」

横にいる憂姉が聞いて来た

「へ？い……いや、ハッハッハ出来たほ「出来なかったんだね」……ハイ」

「全く。大体優は三日前から勉強を始めるからいけないんだよ？」

「はい。平沢優、反省しております」

どうやら僕は憂姉に反論が出来ないらしい。当然と言ったら当然だけれど

「はい、さつさと帰る！帰ったら次は入試の特訓と、補習についての勉強だよ！」

「え？僕ちよつと休みた「勉強するよ！」……ハイ」

この展開は最早お約束じゃないか！

この後、憂姉のいつもよりきつい教育で、次の補習のテストで百点取っちゃいました！テヘ！



## 冬休み前！（前書き）

旅行中ひどい状態で書いた文です。大目に見てください

## 冬休み前！

僕は勉強が好きだ

例え憂姉に「今日は二次関数の復習だよ！」と、言われ。更には先生にも「宿題やらない奴は……分かってるよな？」と、脅されたとしても僕は勉強が一万二千年前から好きだし一億と二千年経っても勉強が好きだと思う！

……

……

……

んな訳ね！

誰だって勉強は嫌いだろ？勉強が好きなのは俺にとって異世界人に等しい人間なんだよ！つまり……憂姉以外勉強好きは異世界人さ！涼宮ハルヒシリーズにでも出てろよ！畜生！羨ましい！

一万二千年前から愛してるのはアクエリオンだけでいいから！うん。そのとおり！

そんな訳でただいま冬休み前、受験もとつくのとうに本格的となつた今、僕は不満気に勉強を解いてます。憂姉にしごかれながらも必死になって勉強を解く姿はまさに勇者！勉強という名の魔王を超えた魔王に挑戦しようとチャレンジしてる平沢さんです

ちなみに憂姉は大抵の問題なら十秒かからず倒せちゃうんだよ！

最強の勇者です

「さつさとこの問題解かないと今日の晩飯抜きだよー」

「笑顔で言わないで憂姉！」

キャラ崩壊してるよ！

もともとこんな事言わない人だった様な気が……しないでもない

そんな事を頭の半分で考えて残りの半分は勉強と言うなの魔王を倒すためフル回転。結構キツイ。昔の復活の呪文を唱えるコマンドを押すぐらいめんどくさいぞ！

だがわからない問題は分からない。しゅしゅ憂姉のところに行き勉強を教えてもらうこの繰り返しだ。因みに憂姉は俺が一問解くと三問は解いてる。流石僕の姉だぜ！と、言うとき唯姉が悲しむので言わないでおく

「これは、この問題のここがXになるから……」

憂姉は問題の解き方を言う時、すごく分かりやすい。なんかもう全てを憂姉に任せちゃおうかな。炊事とか洗濯とか……ってもうやってるんだった。改めて憂姉のありがたさを感じるぞ

「そう言えば優？」

「え？何？」

突然憂姉が聞いて来た

「お姉ちゃんが今度私の家でクリスマス会やるから交換用のプレゼント買ったってだつて」

「え？」

一瞬目が点になる

「僕は約一ヶ月後受験だよな？」

「うん」

「何でOKしちゃったさのさ！」

あの憂姉が！

「お姉ちゃんが可愛くって」

「……憂姉」

最早シスコンじゃない。これは恋愛感情だ！確かに唯姉は可愛いけども！僕は見なかった事にしよう。うん。知らぬが仏だ。知っちゃったけど

「だから、クリスマスまでにプレゼント買ったってね？」

「……え？」

「因みに来るのが和さんと軽音部の人達」

その夜、野口さんが二枚ぐらいなくなる事を覚悟した

## クリスマス会！1（前書き）

今回、コメディー少なめです。クリスマス会って書いてますけど唯達の過去編ですね

## クリスマス会！1

「おお……」

何時の間にかクリスマスツリーが立てられていたのに驚きつつ、僕が幼稚園？で、唯姉が小学生だったころのエピソードを思い出す。

まあ突然だけど聞いてくれると嬉しいな！

「うーん、うーんしょ」

十二月二十三日、クリスマスイブの前日、唯姉と憂姉、そして僕とでクリスマスツリーを飾っていてそして最後、てっぺんを飾る時に唯姉はまだ小さかったので、クリスマスツリーのてっぺんを飾るのに、随分手こずっていた

「お……お姉ちゃん、大丈夫？」

「唯お姉ちゃん！大丈夫？」

まあ実のところ、自分は中1までお姉ちゃんと呼んでいたので、初

めて唯姉と呼んだ時は……ご察しの通り、泣いて抱きついて来たのだが、そこが男の見せ所！心を鬼にして、押し返したのだよ！……まあ可哀想になってしまつて次の瞬間謝っていたのだけど……って話が逸れたな。戻そう

「うん。大丈夫」

そう言つて足を伸ばす唯姉、今の僕なら確実に、全く大丈夫じゃないだろ！と、突っ込んでいたいところだが生憎、昔の僕は純粹に唯お姉ちゃんを助けよう！と思つたわけで、同じ事を考えていた憂姉と共に足を支えて、転ぶ運命から救つたのだ！

だがそんな勇氣ある行動に気づかなかつた唯姉に憂姉とと共にため息をつく

「今年はサンタさん来てくれるかな？」

突然、唯姉がクリスマスツリーを見ながら話し始めた

「私、宿題忘れたり、給食を食べ残したりあんまりいい子にできなかったから……来てくれないかも、プレゼント、貰えますように」

そんな事を言う唯姉。どうしてこんな細かく覚えているのか疑問だが、どうせご都合主義だろう。うん

「大丈夫だよお姉ちゃん！サンタさんちゃんとプレゼントくれるよ！」

「うん！唯お姉ちゃんは僕や憂お姉ちゃんに優しくしてくれるし、絶対にプレゼントもらえる！僕が保証するよ！」



うん。我ながら名台詞。これで、国民名台詞賞受賞出来るぐらいに決まった！（そんな賞はない！）なんて下心はなく、これはいまでも真面目に思っている事だ。憂姉にも唯姉にも感謝してる。

「憂も優もお願いしといた方がいいよ」

そう唯姉が言うと、憂姉は聖母様みたいな感じに手を合わせて

「今年はホワイトクリスマスになりますように……」

「「ホワイトクリスマス？」」

僕と唯姉は声を合わせて疑問を持った声を出す。まあようするに知らなかった訳だ

「雪が降って真っ白になったクリスマスの事なんだって」

「「ふーん」」

まあ要するに、この頃から憂姉はすごかったって事だ。その翌日に唯姉がある意味すごい事をしたのだが……

で、翌日

「憂――！！！！優――！！！！」

朝、確かこの時唯姉がこんな速く起きたのに驚いたんだよな

「速く速く！」

「お姉ちゃん待って——！」

朝っぱらから階段をかけて、靴を履く僕達、疲れるよな。うん。

そして唯姉がドアを開けたそこには……

——雪国はなかったけど木に雪がかかっていた

「ジャジャーン——！」

「「おお——」」

「ホワイトクリスマスだよ——」

と言った唯姉の後、近づく僕達だが

「あれ？」

雪を触るが雪は溶けないし冷たくもない。憂姉も疑問も思ったらしく、首を傾げる

「唯お姉ちゃん……これ……」

そう言うと唯姉はクッションを出して

「クッションの中身！」

「「え——！」」

その日は唯姉は父さん達にたくさん叱られたとさ

\*\*\*

「あはは！」

「どうしたよ優？」

「急に笑いだして、怖いわよ？」

「ゴメンゴメン、思い出し笑い」

という訳で回想終了。皆様、こんな無駄話に付き合ってくれてありがとうございました！

現在、和さんと唯姉と共に街の商店街にクリスマスのプレゼントを選びに行く途中、我慢しきれなくてついに笑ってしまったという事だ決してニヤニヤしてたりしてる訳じゃないよ！僕たちの事で笑ってたんだから！いや、マジで！

「何を思い出してたの？」

「唯姉の事だよ」

「私の事？」

唯姉が首を傾げる。そりゃそうだ

「ほら、昔唯姉が夢にクリスマスにクッション破ってホワイトクリスマスプレゼントしたじゃん」

「そんなことあったっけ？うーん」

流石唯姉！覚えてないか！

「ねえーゆうー教えてー」

「知らない方がいいと思うよ」

「え？なんで？」

「なんでも」

あれは見方を変えれば知らぬが仏と言ってもいいほどのことだから

な。

「ほら優、唯。速く行くわよ」

「あ、待って、和ちゃん！」

唯姉が走り出すのにつれて僕も一緒に走り出す

プレゼント何買おうかなーと、思いながら



## クリスマス会！2（前書き）

更新遅れてすみません！

えーとですね、学校始まったので、全くやる気が出ず、しかも夏休みの宿題が終わっていなかったたので、毎日夜中まで宿題やらなんやらして、終わったと思ったら次は塾の模試があり、その勉強をしねばならない！ってな訳で昨日やっと模試が終わったので、やっと書けました。

他の小説も書かねば……！ってか次中間じゃん！

## クリスマス会！2

「何か良いのないかな」

ただいまクリスマス会に何のプレゼントを買うか検討中。唯姉は優柔不断だから選ぶのが長いんだよねー

……

まあ僕もだけどね！

どうして唯姉と憂姉はあんな違うのに唯姉と僕はこんな似ているんだ！僕は神を恨む！もしもボツクスとかで、「もしも僕が唯姉と似てなかったら」という世界を作ってやりたい！ドラえもん助けて！

まあ可愛いから許す！（姉弟として）

そんな脳内で、神様になんだかんだ言ってる間に唯姉は買うものを見つけたらしく、クマさんのぬいぐるみに抱きついていた

「私これにする」

とか言っただけで笑顔の唯姉に和さんが一言

「普通、自分に当たったらやり直しだよ」

「……」

無言でクマさんのぬいぐるみを戻して



「じゃあこれでいいや」

そう言つて見せたのは昔流行ったたまごっちみたいな感じの親父のぬいぐるみだった

「「おい」」

和さんと僕の突っ込みが見事に重なった

\*\*\*

「やっと決まった」

そう言つて唯姉と共に店を出る。因みにあの親父さんを唯姉は選んだ訳ではなく、知らないうちに買っていた。因みに僕も選んだの

だがなんだかんだで、選ぶのに長い時間がかかってしまった。やはり唯姉と同じなんだなと悲し……嬉しく思っていると向こうに律さんと零さんの姿が見えた

「あ、なんだ！唯達もプレゼント買いに来てたんだ」

律さんが声を出す。いつも通りの声なんて、こんな寒い日の中、お疲れさんです

「何買ったの？」

「それ言ったら楽しみがなくなるだろ？」

「あーそっかーえへへ」

100%零さんの言う通りである。

「そりゃそうだ」

とか言いながら律さんが紙を出した。それを僕達に笑顔で見せて

「ジャジャーン！これから抽選に行くんだ」

ああ抽選の引換券なら……

「僕も持ってますよ。律さん」

「なっ！優達もか？！ふっふっふ。いい勝負になりそうだなぜ」

「望むところです」

「ああ！優と律ちゃんの間にあのパチパチが！」

火花だよ。唯姉

\*\*\*

結果は……

「またティッシュかー」

「何度ティッシュが連続して出れば気が済むんだ……」

どちらも全部出たのは「白色」つまり残念賞のティッシュを貰った。

まあ記念としてとっておこうとは思わない。すぐ捨てよ。このティッシュ君はきつと僕に残念だったね。君には運がないと言う事だ。まあ頑張れたまえと言って俺を見下す最低のティッシュ君なんだ！

「優、言い訳は見苦しいわよ」

「和さん！」

流石読心術の天才だ。TVにでれんじゃね？ほら「読心術の天才！高校生の真鍋和さん！」って題名で！

そんな時、隣の抽選会場で、鐘が鳴った振り向くと

「出ました！一等賞！」

な……なんだと！……一等賞だと！どんだけ運が良いんだ！ってあれは……？

「ムギちゃん？」

そう、軽音部のお菓子をいつも持って来る人、紬さんだった。ってか……

何あの運のよさ……！！

自家用へりみたいなので夏休みに来て、何あれ？あり得ないだろ！そんな事を僕が考えてるとは知らない紬さんは僕達を見つけるとすぐはこちらに来て

「みんなもお買い物？」

「当たったの？」

「うん。ハワイ旅行だって」

そ……そんな事をスラリと言わないでください！僕のハートばズタボロだよ！

ってか何度も言っけど運よすぎだろ！

「でも辞退したの」

な……なんだって……！！！！！！

スラリと言ってスラリと辞退する。なんて謙虚な人なんだ！僕なんて意地でも逃がさないよ！

「こつちが欲しくてクリスマスに皆でやりましょ？」

出したのが人生ゲームだった……人生ゲーム……

ハワイ旅行と比べれば月とすっぽんじゃね？

そんなこんなで紬さんは僕達の驚きの顔に気づかないまま笑顔でクリスマス会の事を話すのだった



## クリスマス会！2（後書き）

感想や誤字などご指摘してください！感想はください！お願いします！

### クリスマス会！3（前書き）

更新遅れてすみませんでした！次回は出来るだけはやく……出来たらいいな……



### クリスマス会！3

パチパチと肉の焼ける音がする。その音と、共にいい匂いも漂って来る。よだれがでてきそうだ。うん。

「はい。これ持ってって」

「りょーかい」

憂姉におにぎりを持たされたので運んで行く。

今日は待ちにまつた運動会！！

……なんて事ではなく、今日はクリスマス会。唯姉の部活仲間と和さんも来るらしい。つてのはこの前言ったか。

と言う訳で、現在、憂姉と共に、食事を作ってる最中だ。とは言ったものの、僕は運んでいるだけなのだが……

まあ唯姉よりはマシか！

唯姉なんて片付け中だから。いやゝあれだわ。姉の上に立ってるってのは凄く気持ちいい事なんだね！

ふっふっふ……今の僕なら戦闘力53万野郎でもかてるぜ！！！！

そんな時。リビングのほうからパン！という音が聞こえた。

「唯姉だな。サンドイッチをおくついでに僕が見て来るよ」

「あ、ありがとう優。ちょっと今手が離せないから」

おお……

なんだろうこの頼られてる感！やべえすげえ気持ちいい！何も言えねえ！

ってな訳で気分がいいまま唯姉がいるリビン  
グまで行くと唯姉がクラッカーを持ってそれを飛ばしていた。

「あつ！優」

「唯姉、掃除してたんじゃないの？」

「えへへ。つい……」

照れてる唯姉可愛いなー（姉ry

と、思いながら、テーブルにサンドイッチを乗せると

「うわゝ美味しそゝ」

「憂姉が作ったものだからね！」

何故か身内に自慢する僕。誰得かって？

僕得だ！！！！

そんな事を思っていると唯姉がサンドイッチに手を伸ばそうとしてい

た！

「唯姉、ダメだよ」

我ながらいい弟だぜ！

結論としては、俺もつまみ食いたいけどね！ここは弟としての意地を！見せてやりたいんだ！まあ作者は実際兄なので、弟の意地なんて分からない（以下、自主規制）

「つまみ食いなんてしないよー」

「そう？ならいいけど……」

で、僕が後ろを向いた瞬間唯姉の方を向く

「ほっ！」

で、僕が後ろを向いた瞬間（ry

「しないってばー」

で、僕が後ろを（ry

（だ……ダルマさんが転んだ状態！！）

なんちゅう器用な姉だ！

「唯姉、遊んじゃだめ！」

僕、いつもとキャラ違うんじゃない？あれだ、これから真！平沢優だな。うん！

新じゃないからな。真だからな！！

「てへへ」

「まだ全然片付けてないし。急いでね」

「りょーかいです！優隊長！」

「頑張ってくれ！唯副隊長！！」

で、唯姉はハサミと折り紙を用意して……

今から作る気か……

\*\*\*

暫くして……

ピンポン

「あっ！はい」

お、憂姉が出て行ってくれるか。僕は今、忙しいし、頼むよ憂姉！  
！！

「「「お邪魔します」「」「」

「どうぞ」

「やつほー唯。来たぞー」

「おーいみんなー上がって」

「何やってんだ唯？」

「やり出したら止まらなくなっちゃって」

「小学生かよ！ってあれ？優は？」

「ここにいますよー」

で、唯姉の横に現れる。まあこれで僕が何をしてたか分かるでしょう！

「おまえら……二人共小学生か」

正解は同じ事をやってたでしたー

いやね、唯姉が楽しくやってたのを見てね。面白そうと不覚にも思っ  
てしましましてね！いや、別に唯姉と一緒にやろうなどとは微塵  
たりとも思っ  
てないし……（すんごく長いんで省きます）

「あ、コートもらいます」

「あ、ありがとね」

「働きの者の妹と……遊び人の姉と弟……」

「不幸なドラマが始まりそうだな」

こんな声が聞こえたがきつと気のせいなんだろう。うん。

不幸なのは上条さん一人だけで十分だしね！

\*\*\*

「おおー料理すげ〜」

テーブルに並ぶキラキラ光った料理達。憂姉。シェフになったら？

「憂ちゃんが作ってくれたの？」

「失礼な！私も作ったよ」

「僕も作ったよ！」

「このケーキ！」

「このサンドイッチ！！！」

「おーすげえ！」

ふっふっふ凄いだろ

「の上に母を乗せました！」

「を持って来ました！」

……

「私の言ったすげえーを返せ！」

「「え？ダメ？」」

ダメじゃないと思う！

「あの。優とお姉ちゃん色々すごい頑張ってくれて。掃除しようとしてくれたり。飾りつけようとしてくれたりそれから……えーと」

……僕は凄くいい姉を持った

「分かった。ゴメンね」

そのゴメンねが同情に聞こえる僕。いや、同情なのか

「じゃあ和ちゃん遅れるって言うから先に乾杯しちゃおっかー」

「おーーーー！！！！！！」

そのいきだ！元気だせ僕！

「うん！」





「まさか、ロープをよじ登り」

「窓から侵入して……」

「忍び込んで来た？」

「ちょっとーひとをなんだと思ってるの？」

聞いたところでは、泥棒かと

「全く顧問を忘れてしまうなんてどういう事？」

「あ、いや。忘れてたって訳じゃないんですけど……」

あれ？律さんの声が急にしぼんで……そこまで強いのかこのさわちやん（仮名）は！

「先生は彼氏と予定があるかと思って呼びませんでした」

ドンガラガッシャー

なんだ！さわちやん先生の後ろに雷が！いや、イメージが！

そして、僕達が焦げてしまうというイメージが、なんでもありが！  
！！

「そんな事言うのはこの口かー！！！」

泣きながら唯姉のくちを動かすさわちやん先生

「天然は……」

「凄い」

まったくだへ お前もな

こうして新たな人物が出てきたクリスマス会！いやもうどうなる  
なんてしまったこっちゃねー！！！！

# クリスマス会！3（後書き）

感想是非ください！

#### クリスマス会！4（前書き）

いや、先週投稿するつもりが、その前の体育の授業が持久走でしてね。それで一年前より一分以上遅くなってしまうて。これはヤバイと、昔競り合ってた奴等とは比べ物にならない程遅くなってしまうた。ヤベエと、ってな訳でスランプにおちいってしまったてすね。

なんとか立ち直ったはいいんですけど金、土、日と、結構走ったので疲れ果てて。で、投稿するのが今日になってしまいました。ぜったいに次は勝つ！！！！

## クリスマス会！4

「罰として唯ちゃんはこれに着替えなさい」

「なんでそんなの持ってるんですか」

何処から出してきたサンタ服をさわちゃん先生を傷つけた理由で突きつけられる唯姉、アンタはドラえもんか

「ジャーン」

なんでそんなすぐ着替えられるんだよ唯姉！

「ダメね」

だがそんな唯姉にさわちゃん先生はきつい一言

「唯ちゃんは恥じらいがたりないわ」

倒れこむ唯姉に憂姉は頭を撫でる。ほんとどっちが姉なんだか

……

べっ、別にやってほしいわけじゃないんだからね！

「じじは……やっぱ」

「ひっ！ー！」

さわちゃん先生が澪さんを見た瞬間立って走る澪さん！それを追いかけるさわちゃん先生

「逃げない！」

「ひー！……！」

……ご愁傷様です

と、そんなとき、

「こんにちはー」

やべっ！和さん！

こんなところを和さんにみられてしまったら……

「ごめんなさい間違えました」

「間違つてないよ！助けて！」

ほら、ああ……

\*\*\*

「もうお嫁にいけない……」

「ドンマイです澪さん」

だったら唯姉達の着せ替え相手になってる僕はなんなんだ。

そっぴい、今回の話で初めてしゃべったな。あれ？そう考えれば僕の存在意義なくね？

僕って主人公なんだよね？そうだよな？

「それじゃあ気を取り直してプレゼント交換でもするか……！！」  
「！！」

「お……！！！！！！」

なんなんだこの2人のハイテンションっぷりは

「ねえ優」

「なに憂姉？」



「高校生ってなんだかすごいね」

「うん、そつ、そうだね!」

この人達などの特例だけだと僕は思う

「あつても先生は?」

なんだかんだ言っに入ってきた和さんが先生がプレゼントを持っているか聞く

「私も持つてきてるわよ」

「おーーーー」

意外や意外、このさわちゃんなる先生が持つてきてるとは。さわちゃん先生のイメージが少しアップした!

「本当は今日、彼氏に渡すつもりプレゼントだったんだけど……」

「「「「「おもたい!」「「「「」

「それじゃー始めるわよーーーー!!」

みんなのテンションダウンのまま勢いで始めるさわちゃん先生

みんなのプレゼントを集めてランダムに渡す

「歌が終わったところでプレゼント」

カセットテープを持ち込んだのかと、思った僕はバカでさわちゃん先生、自身が歌い始めた

さわちゃん先生のイメージが大幅にダウンした！

あれだよ、アイマスで言えば即刻、オーディ

ション落ちのレベルのイメージレベルだよ！今のさわちゃん先生！

そして、更に悪い記者がついて更にイメージダウン！いい事ないね！

もう皆様やる気なさそうな顔……いや、紬さんだけ笑顔だ！何故！何故なんだ！

「ストップ！！」

そんな事を考えてる内にプレゼント交換は終わった。あんなのがずつと続いてたら最悪だな

「これ、あたしが買ったやつだ」

「ああ、じゃあ交換、交換！」

「あ、さわ子先生！」

何故か澪さんがさわ子先生を止めようとするが全く聞こえてないみたいでプレゼントに頬を寄せている

「なにか凄く良いものが入ってるような気がするわ！」

と言って豪快に破いてプレゼントを開けた瞬間！

ビョーン

律さんのびっくり箱がさわ子先生にダイレクトアタック！！！！

僕も含めてみんな一箇所に集まりブルブル震える

「ウヘヘヘヘ、最高のクリスマスだわあああ  
ああああ！！！！」

目を輝かせてそう言うさわ子先生、ああ壊れたか。

「ウハ、ウハハハハハハ」

ちよっ、なにこれ、怖い

\*\*\*

「わあああ  
」

まず、紬さんがプレゼントを開けると、マラカスが！

「あ、それ私が買ったやつ」

澪さん……マラカスって……メキシコ？

次に律さんが開けると、お歳暮……え？

今日って……クリスマス

「あ、それ私の」

「和ちゃんお歳暮じゃないんだから」

和さん、あなたはクリスマスをなんだと思ってるんでしょうか？

で、その和さんが

「「いいなあクッキー」」

紬さんだ。このプレゼントは。俺、それが欲しかった！

で、零さんが……

「キヤアアアア」

へびメタですね、分かります

ちよっ……え？まさかそれを……

「「彼氏に渡すつもりだったんですか？」」

……あ、

「そつよ！悪かったわね！」

すいませんした

「あと、プレゼント開けてないのは、唯ちゃんたち三姉弟だけよね」

あ、そうだった、自分の事をすっかり忘れてた

「早く開けなさいよ」

「「「は、はい」「」」

さわちゃん先生に急かされ、開ける僕達

で、唯姉と憂姉は……

「「「ああ」「」」

「お姉ちゃん……」「憂が

もうそっから2人の声が重なってよく聞こえなかったけど……

僕っていつも仲間はずれだよな。これも運命？やっぱオリキャラだから？

ちくしょう！壁はたけえ！

「お互いのプレゼントが当たってなかったらどうする気だったんだ？」

「よかった〜」

「ありがとつ。憂」

「うん。ありがとう。お姉ちゃん」

あれ？目から汗が……気のせいかな。影が薄い様な……あれ？僕って主人公だっけ？

「で、優は？」

「というか優のプレゼント持ってる人いないよね」

「あ、ホントだ」

待て……もしかしてこれって……

「あ……」

自分のだ。忘れてた。律さんのときに気づいてれば！ああ！不幸だ！不公平だ！

僕に元気を分けてくれ……！！

「で、まあドンマイっていう事で。なんなんだ？優のプレゼントは」

「これです」

そう言って見せたのは透明な球の中に入った雪と、雪だるま

「ほらこれを軽く振ると」

そう言っただけ軽く横に振る

「あつすごい!!」

「雪が上から降ってくるんです。何故なのかは分からないけど」

「すごい」

我ながら良い物を見つけちゃったぜ。けどな  
これをどうしよう……あっそうだ!

「はい、憂姉」

「え?なに?」

「ほら、昔ホワイトクリスマスがほしって言ってたじゃん。覚えてるか分からないけど。自分が持っても仕方ないし」

「ほんと?ありがとう優!」

「いやいや、それほどもないですぜ」

「ずるーい私も欲しかった」

唯姉がそんな事を言ってるが、まあスルーで。いつもの事だ来年は  
なんかあげよう。うん

まっ、憂姉が喜んでくれてよかった……かな?







## クリスマス会！4（後書き）

感想、アドバイスなどよろしく願いします！

## クリスマス会！5（前書き）

他の小説を更新再開したのでこちらの更新が遅れてしまいました。  
すみません

雑談ですが、僕は現在、ある事を忘れていたので後悔してます。

それは……唯とあずにゃんの誕生日の事を全くにもって忘れていた  
事！

これは情けねえ！けいおん大好き人間として失格だよ！唯の誕生日  
の話を書いた自分が忘れるしあずにゃんの誕生日なんて「あつ、そ  
つか！今日はポッキーの日か」とか言ってポッキー食べながら二  
コ動見てた自分が情け  
ない！

あ、もう俺ってけいおん見る資格ないのかな……。映画も前売り券  
買ったのに……。いや、あるはずだ！きつと！

16日に発売されるけいおんのライブCDは絶対買うわ……。ただで  
さえぼ金ねえのに……。  
来月は映画のCD買わないといけないし……。なにこのけいおんラッ  
シュ！

つてな訳で前書き長くなりましたが、どうか本文も読んでやってく  
ださい

## クリスマス会！5

「よし！じゃあ一人一人芸でもするか。」

こんないい雰囲気を「その雰囲気をぶち壊す！！」的なノリでぶち壊してしまった律さん。

「良い話系の流れだったのに」

「あ、漣が一番にやるかあ？」

「ひい！」

「何処の親父ですか……」

「完全に親父ね……」

将来、ずっと笑えない親父ギャグ言ってるそうだと

……

そりゃないか

「じゃあ唯！」

「え？私？うーん」

なんだかあたまをひねってそんな顔で考える唯姉。そんなとき

「はい！私やります！」

憂姉が手を上げた

「えっ？憂？」

この人が手挙げたの？てきな口調で言わないでくれよ………実の妹だろ？

\*\*\*

「こんにちは！メリークリスマス。みんな楽しんでますか？」

パチパチパチ。

憂姉がやった事はサンタとトナカイの人形で  
パペットマペットてきな。腹話術っていうのか？まあそんな事をし  
た。

流石万能なんでも出来ちゃう日本人グランプリ一位獲得の人物だな

注：そんな賞はただの主人公の妄想なので、実際そんな賞は出来ち  
やったりするかもしれませんがほぼありえないのでご安心ください。

あれだな、本当は「私の仕事は平沢唯を観察して情報なんたらに報  
告する事」とか言っちゃったりするかもね、それか「平沢唯のスト  
レスが具現化してできる音人。それを倒すのが私の仕事です」てき  
な？それか「私はこの時間の人間ではありません。もっと未来から  
来ました」てきな？

そんな事はないと願いたいけどね

「えへへ、すみません。こんな事しか」

「準備してたの？」

「お姉ちゃんが一人一芸だと言っていたので」

「えっ！信じちゃったの？」

唯姉……何時の間に嘘を付く悪者に！

「ごめん憂」

「いいよ、気にしないで」

うん。姉妹愛が感じられるな。良い事だ

僕、何処行つた！

「じゃあ私もエアギターギヤツギヤーン」

「唯姉それはずるいんじゃ……」「あ、じゃあ私もチャンチャンチャンチャダダダダダ……おい」

ダメだ。この人達そう簡単に話を聞く人じゃなかった！

\*\*\*



「う……うう」

出てきた瞬間、直ぐ逃げた我らが澪さん。まあそれもそのはず、サ  
ンタ服なんて着たら誰だって穴があったらはいりたい気持ちになる  
だろう。

………

僕の姉以外

「澪ちゃん頑張ったね」

その姉が澪さんを褒めている。うん。これ恥ずかしがり屋（つてか  
あんなの着たら僕の姉以外全員恥ずかしがり屋になるだろ）が全員  
褒めてもじゃあ貴方はどうなの？てきなノリになるから褒めるのは  
唯姉しか不可能だな

よく考えるとすげえな……唯姉

\*\*\*

「モノマネしまーす」

次は紬さん。モノマネっていうと何処ぞの「とったどーー」言ってる人とか歌真似でいうと合唱とかかな？似合いそうだし。

だがそんな僕の予想は全く外れ、頭と首に手を変な形で置いて手を動かす

「な、なに？」

流石の律さんも分からない（いや、誰もわか

んねえだろ）モノマネ。いや、マジでこれなんなんだよ。

「マンボウでした」

同級生だったからこそ言ってたろう

『いや、なんだよそれ！誰もわかんねえよ！』

などと、だが相手は上級生なので……

「ああ、なるほど。確かに似てますね」

と、棒読みで読むしかない！

「おっしゃー次行くわよ！」

次はさわちゃん先生。腹を出して手で叩き

「もみじ」

「……………」

いや、もうなにも言えませんよ。なにやら和さんと澪さんと律さんが涙を流しているが大丈夫なのだろうか？

「さーて。次は……………」

「へ？」

何時の間にやら後ろに立つてる唯姉。あれ。なんだろう？あのピン



「唯お姉ちゃん!!!」

ああ、もう氏にたい。氏にたいんだよ。

「おっ！流石隠れシスコンと言ったところか？」

こんな時に絶対に冷やかに来そうな律さん。案の定来てしまったよ。

「律さん実はですね」

「どうしたの憂ちゃん」

「――こうなんですよ」

こういう時に助けてくる我らが憂姉様。

「へっー優にそんな性質があるなんてね」

「優君って不思議な子ね」

「男の子が女の子に……」

みんなわかってくれたようだ。因みに澪さん。僕、そんならんま2ノ1てきな性質持っていないで、男に変わりはないです。強いて言えば「もう1人のボク」てきな、千年パズルないけど

「えへへ、楽しかった〜弟成分補給〜」

「ハアハア。そりゃ……どうも」

因みにこの人格移動。多大な体力を必要とする。

……

冗談です。精神的なコトをどうにかしなきゃいけなかったんで、つまりムラ……いや、なんでもないわ。うん。なんでもない

\*\*\*

「「「お邪魔しました」」」

ふう、疲れちまったぜ。特に最後

「寒いね〜憂、優」

凍えながらも言う唯姉、と、そんな時、

「あ、雪！」

「え？」

上を見ると、雪が降っていた。ホワイトクリスマスなんて、東京にこんな雪が……

「本当だ！ホワイトクリスマスだねー」

「お姉ちゃん。私達にホワイトクリスマスをプレゼントしてくれた事あったよねー」

「え？うーん。優も言ってたけど、うーん。本当、思い出せない」

まあ僕は覚えてないほうが唯姉らしくていいと思うけど

\*\*\*

「ふう……」

今日はいろんな事があったな。こんな騒がしいクリスマス会初めてだ。

コンコン

「はい？」

「わたしだよー」

ドア越しに唯姉の音がする。なんだろう嫌な予感しかない  
まあ家族だし……いいか

「入っていいよ」



そう言うと、ドアが急に関き、

「突撃ー」

「うわー!!」

嫌な予感的中！ダイレクトアタックを平沢優は受けた！！

「しかも憂姉まで！」

気付けば横に憂姉がなんだこのシチュエーション。良い匂いしまく  
りで当たってるんですが

「ちよっ、なんで入ってきたの？」

「いいじゃんたまには家族なんだし」

「それとこれとは……ハア」

まあいいか。

「今日はこれして寝るんだーあつたかいから」

「私もこれして寝るんだーあつたかいから」

「暖かそうだなにより」

僕はないけどね！

「えへへ、貸して欲しい？」

「遠慮しとく。電気消すよ」

「はいはい」

パチ

その後、良い匂いがしすぎて眠れなく、しかも、布団を唯姉が全部とってしまったので殆ど寝れなかったのは訂正出来ない事実！



## クリスマス会！5（後書き）

なんだかんだでシスコンの優

感想などお願いします！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1035u/>

---

けいおん！とある弟の人生

2011年11月17日21時24分発行